
筆持つ阿呆に、読む阿呆。

鳩里 登太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

筆持つ阿呆に、読む阿呆。

【Nコード】

N5025Y

【作者名】

鳩里 登太朗

【あらすじ】

『小説家になろう』の作品は、私の作品以外クソである。

私の小説は必要だが、他は必要ではない。

他の小説を読むより、私の小説を読む方がよっぽど有意義である。

つまり私が言いたいことは。

頼むから黙って、私の小説だけを見てくれ。

001 読者など要らぬ。ただちに去れ。

「この、愚か者！　くたばれ、おたんこナス！」

遺憾ながら上記の一句は、小説の物語の内に住む誰かに向けられた言葉ではなく、この文章を目に通すあなたに向けた一言である。驚かせたなら失礼千万、しかしながら前言を撤回する気は毛頭ないとも言っておこう。

読者各位様、恐らくあなたたちは相当の読書好きであつたり、本の虫であつたり、はたまたビブロマニアックであつたりしてきつと数多くの書物に目を通しておられると推察致すが、恐らく一行目の第一句から罵られた経験は無いとおもう。

けれども、この導入部分は決して斬新な手法で読者の興味を惹こうだとかそんな考えのもとに出た発言ではなく、私、筆者が、あなたたち、読者を、心の底より愚かだと思ったから侮蔑申し上げたわけである。

では、何故私がこのような発言をするに至ったのか。

理由は単純で明快である。

この「小説家になろう」のサイトの中には、それこそ面白い作品が星の数ほど存在している。例えば、設定が破綻している魔法モノであるとか、散々使い古された設定をドヤ顔で書き連ねたドラゴンモノだとか、陳腐極まりない恋愛モノだとか、エトセトラ。

そんな中で、わざわざこんなどうしようもない、畑の肥やしにもならない作品を開いて目を通して、挙句ここまで読み進めて貴重な時間をドブに捨てたあなたには、そりゃあもう「愚か者！」と言わざるを得ないわけである。「くたばれ」と言われても仕方ないのである。「おたんこナス」だといわれるのは自業自得なのである。

何を期待してこの作品を開いたのかは知らないが、この作品に何かを望むのは間違っていると断言しておこう。何一つとして期待さ

れざる作品である。重ねて断言申し上げる。
以上である。

なんだ、まだ読んでいるのか。

君は莫迦なのか、それとも阿呆なのか。

バカは、バカであるゆえに自分がバカだと気付かない、とはよく言っただが、しかしそれはバカを肯定しているということにはなりえない。自分がバカだと気が付いていない者ほど醜いものがこの世にあるだろうか。

まだこんな悪文に目を走らせる末期バカ患者の君にもわかりやすく例えてやろう。

いわば、この小説は道端に落ちている冷え固まった犬のクソである。

そしてあなたは、その傍でしゃがみこんでジッとクソを眺めているようなものだ。

どうだろうか。バカなあなたにも、あなたのバカさ加減が理解して頂けただろうか。

そっというわけで、サヨナラだ。

どうにも、まだこの小説の片隅でゴソゴソと何かが蠢いている気配がする。やれやれ、馬鹿に付ける薬は無いというけれど、どうにも特効薬のない悪疾患者がまだ居残っている様子だ。

まっとうな感覚の人間ならば、開口一番罵られたことに憤懣するか、はたまた呆れるかして何処かへ去るはずである。

まだ残っている諸君は、異常であると言わざるを得ない
むしろ猛者だと褒めてつかわしたい心境ですらある。

罵詈雑言のために開いた口も、閉口である。

よろしい、筆者も根負けした。

ならば勝手にするが良い。もはや、このクソを眺めるあなたたちに干渉することはない。読みたければ勝手に読むが良い。但しそれによって、どういう悪情、劣情を抱いたとしても、それは筆者のあずかり知らぬところである、ということだけは承知していただく。

この小説は、筆者の日常を、ときには大胆に、ときには繊細に綴った私小説である。

平たく言えば、日記帳だ。

さらに言えば、自己満足の自慰ですらある。自慰でしかない。

文章を書く練習のために、何気ない平々凡々日々常々を記しただけの、それこそチラシの裏にでも書いておればよろしいという程度のものだ。

内容は悪逆、悪相で、それを語るは悪声、書き方は悪辣で悪罵、総合的に見て悪魔的で、なおかつ筆者はただの芥である。筆者はコンプレックスの塊であり、見せたいところなど一つも無く、魅せるべきなど一つも無い。

それでも良い、むしろそれが良いと言う、そんな悪たれどもは、勝手に筆者の通った轍を眺めるなどすればよろし。

それでは今を持って、冷笑的で毒舌的なダイアリヅの開帳を宣言す。

002 嘘です、読者様は唯一無二の神様です。

初回の冒頭で述べたとおり、当紙は何の面白味も有り難味もない筆者の日常を、嘘と脚色で飾り立ててなるべく面白く書きつづつてやろうというものである。

無意義な日常をなんとかかんとかして、文章をこねくり回して有意なものに変えてやろうといった魂胆である。

しかしながら、例えばそこに素晴らしい脚本があつたとしても、何処の馬の骨とも知らない人間の演じるドラマが売れるだろうか。答えは推して知るべしである。超一流の脚本と演出で織り成されるドラマよりも、キムタクあたりを主演にあてたB級ドラマの方が売れる時代である。

ゆえに、何だかんだとりあえずである、筆者の人となりを知ってもらいたいのである。

知った方が良いのである。

知るべきである。

今後作品を楽しむために、知れ。

私は男である。

生まれたときは裸であつたし、今も時として裸である。

趣味は部屋に引き籠もって出来ることであり、酒と煙草を嗜好する。言うまでもなく裸で、である。

両親ともに健在で、七つ上の兄がいるが、私は丸々太った彼の連絡先を、豚とアドレス帳に記している。

日中はラーメン屋、夜はコンビニで働いており、何の変哲もない両アルバイトが、意外とアイデアの源泉だったりする。

嫌いな人間は常識の無い人間で、好きな人間は常識を知りつつ破

る痴れ者である。

そして、私は大学生であつた。

小説家を目指すと言つたきり学校に行かず数ヶ月引き籠もつた後、両親と三日三晩の死闘を演じた末に、退学する権利を勝ち取つた。心身ともに満身創痍であつたが、銃創にまみれたその足はとても軽やかなものであつた。

その足で意気揚々と大学へ闊歩し、威風堂々と校門をくぐつたのち事務室のドアを勢いよく開け放つて、凜として事務員に退学書類を突きつけた。

その光景はまさに、私の覇道の第一歩であつた。

「記入漏れがありますので、再度提出をお願いします」

覇道の一步目は、奈落の底に通じる落とし穴であつた、無念。

片道二時間半の通学に心身ともに疲弊しきつた私は、今となつては一月末を持つて、学費未納者として向こうから放校してくれるのを待つ身なのである。

ところで、一度目の学費未納時に大学側から届いた書類の文面は恐ろしいものであつた。

大学側曰く「期限までに学費を納付できない方は、しかるべき処分をご容赦下さい」ということであつた。

「ご容赦下さい、などと聞けばこちらが嘆願されているかのようにもおもえるが、その言葉の実のところは「錢、払えないなら、君、終わりね」ということだ。まるでオブラートに包んだ死神の鎌である。その切っ先の鋭さたるや、オブラートを突き破っており凶ましい本質の部分が隠しきれていないではないか。

私は元々辞めるつもりの人間だつたからいいものの、だ。

もしも仮に私が、勤勉であるが家庭の貧窮により学費を払うことが出来ない苦学生のような立場だつたならばどうだつただろう。

あの冷酷無比な文面を見ただけで錯乱の極致に達して、タコによ

うにぐにやぐにや、イカのようにぐにやぐにやと、二泊三日ほど全裸で踊り狂う羽目になっただろう。公衆の面前、それも人通りの多い阪急梅田駅辺りで、である。そして然るべき後に、貧しさと社会的恥辱により死んだに違いない。

私立大学というのはどうやら、金の無い人間は死んでもよいとさえ思っているのではないかと、私は疑っている。

けれど私は精神的に鍛錬された芯の強い人間であるゆえに、そんな苦境もものともせず、ただただ放校を待っているのである。

そんなこんなで、私は退学生である。

大学生と退学生、響きが似ているこの言葉を見比べて、押韻愛好家の私は至るところで活用することになっている。

どこその店に、例えばカラオケ屋に行ったときに、「退学生です」というと、十中八九店員は「大学生の方は、学生証の提示をお願いします」と言う。そこで、「いいえ、退学した生徒なので、退学生です」と言っただけなのだ、ふふん。

そうすると店員は、白けた様子で表情を引きつらせて、私に対して無慈悲に一般料金の支払いを強要するのだった。

この世には神も仏もない。そこにあるのは、悔しさに唇を「？み」、世間に対してもう「放つとけい」と拗ねてみせることしか出来ない自分だけだった。

とは言いつつも、自分で選んだ道なので一片たりとて後悔など無い。

私は基本的に厭世的な人間であり、いつどこでどのように死んでも、まあいいか、と考えているような人間である。ゆえに、つがいを見つけ交尾し種の存続を守るといった本能的な欲求に従うよりも自分の好きなことをやりたいな、と思うような人間なのだ。

なのでいまここでこうしてこんなことをしており、ありがたくも

落伍者の刻印を押される羽目になったわけである。

以上が、自分の現状を簡潔にまとめたものである。

私に関しては、これからお話を読み進める上で最低限知っておいてもらねば困るが、あまり長々と書き連ねるのも退屈であるので、自己紹介はこれでよしとしよう。

私がどのような人間であるか、ということとは、これから綴る日記に沿って掘り下げて知ってもらうことにしようと思う。

003 意中のコンビニ店員を、落とす方法

筆者が大学を辞めて小説家を目指しているのは今更言うまでもないが、もちろん夢だけでは日々の糧もろくに贖うことはできない。

そういえば昔誰かが、「飯のために夢を叶えるんやない。夢叶えるために飯を食うんや」と言っていたのを今ふと思い出したが、よく考えてみればずいぶんと不可解な言葉であると思う。

「夢を叶えるために飯を食う」というのはつまり、今の時点では夢は叶ってないわけである。いわば夢を語っているだけの状態である。夢を語るだけの立場でありながら飯を食うというのは、それはもはやタダ飯喰らい以外のなにものでもないのではないだろうか。夢を語ることと具体的な収入を得ることが出来るのならまだしも、そうでない場合はタダ飯喰らいが開き直っているだけのようで、いささか私としては嫌悪感を顕わにせずにはいられない。

夢を切り売りしてもお金を稼いでいる方が、断然カツコイと私は思う。

話が逸れたが、つまり私は夢を語っては働きもせずに飯を食う類の人間ではなく、いちおうフリーターとして少ないながらに賃金を稼いでいる人間である。高価な何かは望むべくもない額の収入であるが、恬淡とした人間であると自負しているぐらいなので、高望みをすることもなければ、何とか生きていけている。

陽光照りつける明るい時間帯は、平、休日問わずラーメン屋でバイトをしている。

そして週に二度、週末の深夜から朝にかけてはコンビニでバイトをしている。

ラーメン屋の方はまだ入ったばかりで駆け出しのペーペーであるが、コンビニの方は働き出して一年と半年ぐらい経とうとしており、それなりのプロフェッショナルである、とわれながらに思っている。

コンビニ業界の酸い甘いを知り尽くし、果てはその片隅の方に小さく見える深淵の如き業界の闇の深さも、知っていたり知っていなかったりする身である。

コンビニ店員を落とす方法、というのはつまるところ、コンビニ店員を自分に惚れされる方法のことである。一見すると難しそうにも思えるが、セブ。ア。ドアイホールディ。グスにこの私-in、業界きつてのの雄であるとされている私だ。赤子の頬をつねるより容易い

さて、前置きはこれぐらいにして、コンビニ店員を落とす方法の具体的な指南に入っていきたいと思う。
が、まずは問いたい。

「あなたは、自分の容姿に関して、自信がありますか」

もしこの質問に、何の迷いも躊躇いもなく、力強く頷けるあなたに言うことは何もない。

連絡先を紙などに書いて渡せば、万事解決である。

私が指南するのは、地道に好感度を上げていき、外堀を埋めて落とすタイプの戦略である。そもそも始めから、好感度というバロメーターなど論外とするかのようにコロコロと異性を落とす諸君には、私からもたらすことの出来る恩恵など存在するはずがないのである。それどころか、妬み嫉み僻みの言葉しか出てこない。

「イケメンなら死ぬ」「美人なら抱かせろ」「それが出来ないなら即刻去れ」

そんな具合である。

……こんな暴言を羅列すると、気を悪くされたかもしれない。けれど安心して欲しい。

あなたが私に気を悪くする以上に、私はあなたに気を悪くしているのだから。

そんな私をあなたは、醜い嫉妬だと笑うかもしれないが、それは仕方の無いことである。顔が醜い以上は、嫉妬する姿も醜くなるものである。それどころか、私が何をしたところで醜いのである。

読書感想文で市から表彰されたあの日も、運動会の駆けっこで一等賞を取ったあの日も、私は例外なく醜かったに違いない。

はつきりと言うが、私は、自身が醜いゆえに、見た目の美しいものが嫌いである。

というわけで、容姿端麗の諸君、帰れ。

但し、「どうしても容姿だけでは、気になるコンビニのあの子を落とせないのです、助けてください」と言うのであれば、器の大きい私であるから情状酌量の余地を与えないでもない。

そこに直って平伏すが良い。そして私のために神殿を立て、一日に三回私の居る方角に向けて礼拝すると誓え。

そうすれば、私が心根より憎む白哲の諸君にも、私の恩恵の一抹を与えてやらんでもない。

なんたって私は、優しい人間なのだから。

さて、冒頭の質問に対して、伏し目がちに首を横に振ったあなた。つまるところ、外見が醜いという何のありがたみもない、ドス黒い糸で私と繋がれた同志のあなた。

まずは、安堵してほしい。

私の教授する手法をもつてすれば、どんなに顔が醜くともコンビニ店員を落とすことが出来る、と約束する。それどころか、大した努力もせずに次々と異性を己が手中に陥れる、癪に障るあの勘違いどもを出し抜くことすら可能である。

彼らは、いわばたまたま遺伝子配列がちょっと良かっただけの、

ラッキーマンでしかない。

これまでに何の苦しみもなく、日々の研鑽を怠り、歓楽を享受するだけの、息をする阿呆である。

そんな彼らが、ちゃんとした過程を経て、努力してきた人間に太刀打ちできるはずがないのだ。

立てよ、顔の醜き諸君。

いまがまさに、捲土重来のときであるぞ！

しかしながら、少しかりの問題がある。

私は、容姿の優れた人間が嫌いなものと同じくらい、同族嫌悪によって容姿の劣る人間も嫌いなのだ。

私自身が醜いことを否定する気はさらさらないが、かといってそれは、私が醜い人間を好きだということにはならない。

そもそもの話だ。

われら醜い人間は、孤高の士であるはずではないか。

種の存続を諦め、人間が普遍的に享受できるはずの恩恵を諦め、拳句には全うな社会的評価を得ることすら諦め……。そうやって全てを諦めた先に、我らの醜いながらも鋭く尖って芯の強い誇りがあったはずなのである。

それを、「安堵してほしい」と言われればすんなりと安堵し、「容易く異性を落とす方法があるよ」と言われれば春うららかな露出狂も真っ青な破廉恥ぶりで乗っかるうとする。

私は、誇りを失ったそんなあなたがたが姿が気に喰わない。

醜い人間は何をしても醜い、と書いたけれども、誇りを捨てて易き道を選び大衆に迎合しようとするあなたたちは、いつにもまして直視しがたい醜さである。

気付いてないのなら、鏡を貸して差し上げようか。

重ね重ねはつきりと言わせてもらうが、私は見た目が醜いものが

嫌いである。

というわけで、容姿が暗澹たる諸君、帰れ。

但し、「何と罵られようとどれだけ醜くなろうと、私はあのコンビニの子だけは落としたいのだ、助けてくれ」というのであれば、また別の誇りを見つけた諸君を私は穏やかな目で見てやらんことでもない。

そこに直って平伏すが良い。そして私のために神殿を立てて、一日に三回私の居る方角に向けて礼拝すると誓え。

そうすれば、私が心底より忌避する不醜の諸君にも、私の眷属の末端に加えてやらんでもない。

なんたって私は、優しい人間なのだから。

よろしい。

外見が美しい諸君も、おぞましく醜い諸君も。

両者思うところはあるだろうが、あなたたちは今を持って、「コンビニのあの人を手に入りたい」という共通の目標の下に結束する同士である。

その願いを本気で叶えたいと思うのならば、次号を待つが良い。

私は美しい人間も醜い人間も大っ嫌いだが、本気で何かに取り組もうとする人間は、その容姿に美醜に関わらず大好きなのだ。

決して損はさせないと、声高らかに宣言しよう！

……そしてヒソヒソ声で、決して得になるとも言えないよ、と誰にも聞こえないように予防線を張るのも忘れない。

004 意中のコンビニ店員と、懇意になる方法。(前書き)

文章の読みやすさを意識しました。

004 意中のコンビニ店員と、懇意になる方法。

時として文章というものは暴走し、筆者の統制の下を離れて、まるで文章自体が意志を持ったかのように振舞うことがある。

しかし言うまでもなく文章に意思が宿って一人歩きなどするはずもなく、得てして筆者の手綱の握り方が甘いのが原因である。

前号の記事を読み返して私はそう思うとともに、少々反省した。

何の気なしに書いて、ろくに読み返すこともせずに投稿した文章は、目も当てられないぐらい酷いものであった。確かに、意図的に文章をこね回してくどくしているのには相違ないが、それにしても本来の趣旨から外れ過ぎていたな、と猛省中である。

多少のひねりは文章におけるスパイスになるが、過量のスパイスを加えることはもは本来の料理とは変質した何かしか産み出さない、ということを学んだ。

よって、今号では、必要な情報なるべく的確に伝えることに主眼を当ててみようと思う。

それでは、早速、コンビニ店員を落とす方法の、具体的な内容について書き出そうと思う。

前号にも書いたのだが、私が伝する手法は、ざっくり言えば地道な作業である。ものの数分の間に、うおんちゅーな人間の心中をあつさりと手中に収められるような、魔法じみたものでは決してない。ゆえに、この手段を使って落とすのは、気の長い作業になるだろう。

この手段の過程に、派手さや瀟洒さはない。

どころか、終始地味である。

上記を了承した上で、それでもいいからとりあえず使ってみたい！
藁にでも縋りたい！ という切羽詰った諸君は、縋ってみればよ

いのではないだろうか。

もしかしたら、握り締めた何の変哲もない藁から、赤い大きな薔薇の花が、咲かないとも限らない。

これは前提として、目標とする相手の性格、嗜好、性癖を充分に考慮しなければならないことであるが、接客が大好き！ という一部の数奇な人間以外を除いて、基本的にコンビニ店員は客が大っ嫌いである。

客からの利益が自身の給与になる、なんていう当然の理屈は言われるまでもなく分かっているが、それでもなるべく客の数が少ないのがいいな、と考えている者が大半である。

なぜなら、コンビニの仕事の主は確かに接客ではあるが、それと同時にこなさなければならぬ作業も非常に多い。納品、品出し、陳列の整頓、清掃、その他諸々の雑務。

枚挙に暇が無いのでこれ以上は語らぬが、とにかく膨大な仕事量があるために、それを消化するためになるべく客に来て欲しくないと思っているのが、実情なのである。

そういった理由から、ある意味ゼロスタートより厳しいマイナススタートの戦いであり、先の見えない戦いになることは、一目瞭然である。

そして、そんな実情があるために、基本的に店員は客に対して冷淡である。

どんなに愛らしい素敵な笑顔を咲かせていても、それはあくまで営業スマイルというものであり、決して特別な感情を抱いているわけではない、と断言しておこう。

稀に例外もあるが、それは飽くまで「稀」であり「例外」であるので、自分がそういう状況になっても決して勘違いをしない方が懸命であるといえる。

「客に対して冷淡」というのは、つまり「客に対しての関心が薄い、

無い」と言い換えても問題ない。

いわば、コンビニ店員は客のことを、「足が生えて金を落とすじやがいも」程度にしか認識していない、と考えてもらってよろしい。独裁国家の主たる人物が、民衆の命を蚊とも思っていないように。または尊大なる霊長類人間様が、耳障りな蚊の命を屁とも思っていないように。

それ以上にコンビニ店員は、客のことを何とも思っていないのだ。これは分かっているようで分かっていない人間が多い。

無関心は、時として憎悪の感情よりも、大きな障壁となる。

大前提として、これを頭に叩き込んでおいて欲しいのだ。

さて、怜悧で見識深い諸君の中には、最初に何をすべきか気付いている者もおるだろうが、そう、つまり「コンビニ店員に認知される」ことが最重要であり、最初の課題なのだ。

「その為には具体的に何をすればよいのだ、もったいぶらずはよ言え！」

と、私を罵り出す精神的早漏な人間もおるだろうが、話は簡単である。

つまり、対象となる人物が店に居る時間帯を把握した後、通えばいいのである。

「時間帯を把握した後、通うだって？ それではまるで、ストーカーの所業ではないか！ この悪辣漢！ 新聞の購読代金を即刻返還せよ！」

と、怒れる群集よ、ひとまず鎮まりたまえ。

一見すると付きまといのようにも思われる行動だが、しかしなが

ら断言しよう。

人間の生活リズムというものはかなり規則性の高いものであり、それがコンビニやスーパーなどの生活に密着する類の店であれば、行く店、頻度、時間帯などはほとんど変わらないものなのだ。

これは、統計などの数字を元にしたのではなく、私自身の経験測である。

実際、コンビニで働き出して数ヶ月そこらを過ぎると、来客の八九割は見知った顔であり、初見の客というのは驚くほどに少ない。

これは、深夜の時間帯だからだということも噛んでいるだろうが、きつと日中でも絶対数が増えるだけで、割合としては変わらないと推測する。

現実はそのようなものである。

よって単純に、対象のシフトにあわせて店に通うようにすればよい。

しかし、単純な作業というのはしばしば時間を有するものであり、このへんは相手次第だが、はっきりと認知されるまでにどれぐらいの期間が掛かるか分からない。

己が忍耐力と財力との勝負になるだろうが、最初にことわったように、正攻法とは地道な作業なのである。

正攻法とは、正当な攻略の方法のことである。

何かしらの努力も無しに結果を求めるような邪道よりは、多少は苦勞してもその分見返りがある可能性の高い道を選ぶことを心よりオススメ致す次第だる。

更なる攻略法は、次号にて掲載す。

それでは諸君、意中のあの人の居るコンビニへと。

疾^{はし}れ！

005 意中のコンビニ店員を、懐柔する方法。

前号にて、コンビニ店員を落とす第一歩目は、ずばり「コンビニ店員に認知されること」であると説いた。

そしてそのためには、ともかく対象となる人間の居る時間帯を狙って、店に通い詰めるといふことも言ったと思う。

けれど、闇雲に通うだけでは、いささか非効率である。

例えば、相手が他人に対して極度に無関心な人間だった場合、最悪、いつまで経っても認知してもらえない可能性すらある。これは非常に痛い。地道な作業であるだけに、なるべく効率的な手段を用いなければならない。

そこで使えるのが「アブソリュートバンパクト追随亡絶鮮衝」と「リメンバード不朽追憶欠片」の技法だ。

……。

正直に告白するが、私はいまちよつとにやにやしなからこの記事を書いている、むふふ。

そんなことはどうでもいいのである。捨て置け。

つまり、「インパクト」と「記憶の手助け」を駆使することによって、認知される過程が効率化するのである。

と、こんな言い方をしても諸君の頭上にクエスチョンマークが浮かぶだけであることは目に見えているので、順を追って説明したいと思う。

まず「インパクト」から説明しよう。

その言葉を額面どおりに受け取って、「気になるあの子に、僕の体の隅々まで見せちゃうもんねっ ふんすっ!」と、鼻息荒く早まった行動をするのだけは避けて欲しい。

それは確かに、認知という点に関してのみ言えば、パーフェクトであるし、この先三年は対象の人物、ひいては対象の店舗で語り草になることは間違いない。

けれど、恋の成就という点に関していえば、恐らく間違っているとは私を考える。

「インパクト」とは、つまるところこういうことだ。

効率よくコンビニ店員に認知されるために、「印象付け」をしよう、ということだ。

では、そのために具体的に何をすればよいのか？

結論から言うが、レジでの会計の際に「ありがとう」と一言添えるのが、一見すると普通の行動のようであるが、一番効果的な手法である、と私は考える。

拍子抜けした方も多いかもしれないが、この結論、実はかなり理に適っている。

まず、「自分に好意を抱く人間に対して、同じように自分もその人に好意を抱く」というアレである。「ありがとう」と言われても何も感じない例外的な人間も居るには居るだろうが、少なくとも悪い気分になる人間はまず居ないのだ。そして大半の店員が、少しほっこりとした嬉しい気持ちになること請け合いである。

具体的な例を出すと、ちよつと氣勢の強い土方のおっさんが、「これ温めて」「袋、別にしといて」「あと煙草、いやそれちやう。それや、それ」「カートンでくれや」と矢継ぎ早に注文して来たとして、当然店員の心情的には「なにこいつめんどくせえ！」という具合であるが、そのおっさんが帰りがけに満面の笑みで、「おう、ニイチャン、ありがとうな！」なんて言ってくれた日にはもう、今まで面倒くさいと思っていた自分が恥ずかしくなって、全力で「ありがとうございました！」と返してしまうのが人間の性である。

このように、シンプルであるが、有効な手段である。

むしろ、シンプルゆえに効き目が分かりやすいと言えるかもしれない。

更にこの手法の根拠を裏付ける理論として、「不良がたまに良いことをすると、すぐく善人に見える」というアレも関わっている。

どうということかというところ、客というのは「ありがとう」という人間の方が少ないものである。「ありがとう」と言うことが習慣付いている人間には驚くべきことかもしれないが、実質的比率は7:3ぐらいで言わない人の方が多いのである。

そうすると店員の中で、客「ありがとう」を言わない、という図式が成り立つ。

つまり、「ありがとう」が無いのが前提であるがゆえに、不意の「ありがとう」に図らずもインパクトを受けるわけである。

そして、である。

これは重要なことではあるが、一口に「インパクト」と言っても良いインパクトと悪いインパクトがあるのは言うまでもない。

例えば、コンビニの店内で常習的に騒ぎまわる青年が居たとする。認知の点で言えば、確かに覚えてもらえるだろうが、それは悪い意味での認知になるのである。

もちろん、恋の成就など望むべくはずもない。

それどころか、店員が「意図的に誤って」アイスなどをレンジでチンされかねない。

その点、「ありがとう」というのは、「インパクト」を与えて認知を助長する、且つその認知は「良い認知」なのである。

これを使わない手はないだろう、読者諸氏よ。

更に応用として、レジに品物を出す際に、バーコードを上に向けて精算の手助けをする、という高等技術も有るが、これは初心者に

はオススメしない。

高等技術であるがゆえに使う人は滅多にいない。なので認知に直結するにはするが、バーコードを把握していなければ出来ない芸当である。多分、私ですらスムーズに行うことは難儀であると考える。更に、バーコードを上向ける際にまごついてしまつては、挙動不審な印象を与え逆効果である。

よって推奨はしない。

但し、缶コーヒーだけ買つて行く、などの際にさり気なくバーコードを上向けて差し出すなど、使い方次第では効果靚面な場面も多々あるので、そのあたりは自分の頭でよく考えて、臨機応変に対応してもらえれば幸いである。

さて、次は「記憶の手助け」の項目である。

これも、本質的には「インパクト」と同じであると言つていい。但し、「インパクト」が自分から率先して印象付けするという能動的な行動であることに対して、「記憶の手助け」はあくまで店員に印象を付けられるのを助けるという、どちらかといえば受動的な行動であるということである。

これも、やることは実際シンプルである。

例えば、なるべく購入する商品に類似性を持たせることである。細かい銘柄まで統一する必要は無いが、例えば日用品類を買うようにしておけば、「あの人は生活雑貨をよく買う人だなあ」だとか、チョコレートや和菓子などを買うようにしておけば「たぶん甘いものが好きな人なんだなあ」だとか、店員の方で勝手に印象を付けてくれるのである。

そしてその際たるものは、なんといっても煙草である。

煙草の銘柄をよほど変えない、もしくはマイナーな銘柄を選択しない限り、「この人」煙草の銘柄」といったような印象付けもされるわけである。

個数と銘柄を固定しておけば、通い詰める内に、あらかじめソツとレジにその煙草が置かれている日が来るかもしれない。そうなれば、認知は大成功と言ってよいだろう。

「記憶の手助け」の異なった例として、服装などもその範疇に入るかもしれない。

別にお洒落である必要はない。お洒落であつた方が印象は良いかもしれないが、少なくとも認知の点にのみ絞つていえば、服装にも統一感を持たせておくことが重要なのである。

例えば仕事帰りを装う作業着や、スーツ、もしくはジャージ、小綺麗な私服など、「この服装」○○○という図式を成り立たせることが大事なのである。

但し、「記憶の手助け」というのはどちらかといえば副次的であり、もつぱらの主砲は「インパクト」であるということは、言わずもがなである。

さて、今回は長くなったが、これは基礎である。

ただの基礎ではない。

会計のときに「ありがとう」ということなど、当たり前のことであるし、ここにあることを行つたからといって、他の客に優越して頭が抜き出るということはたぶん、恐らくない。

やっとスタートラインである、ということを自覚して、慢心しないようにしてほしい。

また、基礎だからといって手を抜くのは、もちろんいけないことである。

応用は、基礎を知るが故の応用なのだ。

基礎無くして、まともな家が建つはずもなし。

ましてや、客の立場からコンビニ店員を落とすという、東京スカイツリーを建設するどころの難易度ではない。

大日本ヘヴンメタセコイアを建てようするようなものだ。

基礎どころか、地盤からすっかりしていないと、建つものではない。

読者諸氏、くれぐれも驕慢せず、かといって地味ゆえの苦痛に退廃することなく、氣を引き締めてことに当たってほしい、と私は切に願う。

コンビニ店員を落とす方法は、次号で締めとなる。

そこに私の持ち得る限りの、智謀策略、叡智謀略を注ぎ込もうと考えるので、是非目を通されたい。

006 意中のコンビニ店員と、寝具を共にする方法。

小説は、文章を飾り立てることで香りが引き立ち、味わいが深くなる。

しかしながら、評論や、もしくは単純なメモ書きなど、人に伝えたい何かがある場合は必ずしもそうだとはいえない。むしろ簡潔な文章で、事象を正確に伝えた方がよい。

今号においては、私は文章に対する装飾をなるべく施さないつもりだ。

文章自体に対する楽しみよりも、それ以上に伝えたい何かがあるからだ。

まず始めに、前号のおさらいを簡単にしよう。

コンビニ店員を落とす第一段階は認知、つまりコンビニ店員に自分を覚えてもらうこと。

そのためにすべきは、対象の人物のシフトに合わせて店に通い詰めること。

そしてそこで更に役に立つのが、会計の際に「ありがとう」と言うことと、なるべく毎回買う品種に統一性を持たせること、だった。

ちなみにこれだけ行えば、店に行く頻度によるが、一月あれば顔を覚えてもらえることはほぼ確実だと断言する。

一月で、下準備はおおむね完了するわけだ。

ここからが問題だ。

元も子もないことを言ってしまうと、ここからは個人のスキルによるとしか言いようがない。何故なら、ここからは積極的に店員と

コミュニケーションを取って行く段階であり、私はあくまで最低限の作法程度しか教えることができない。

いわば、個人の能力に付随する、補助的な何かしか教えうることに無いのだ。

コンビニ店員シリーズの比較的初期で、「絶対に落とすことができる」なんて大言壮語を吐いておきながら情けない限りであるし、読者諸氏には申し訳ない。

けれど、人生の大きな選択なんていうのは、結局自分以外が決めようもないし、決めるべくもない。そしていかなる選択の結果も、全てが自己責任になるのだ。

再度申し上げるが、私は補助的な何かでしかないのだ。

だから、私の記事を読んで事態が好転しなかったり、または悪転したとしても私は悪くない、貴方が悪いのだから、くれぐれも私を叩かぬように。

顔を覚えてもらうという下地が出来たいま、次に行くべきは、客：店員ではなく、人：人のコミュニケーションである。

恋愛において、立場だとか階級なんていうものはいつの世でも阻害の要因でしかなかった。だから、それを取り除いていかなばならない。

まずは意中の人間をよく観察しよう。

彼、彼女はどんな人間であるか、大雑把な輪郭だけでもいいから、とりあえず知る。具体的に言えば、自分以外の客に対してどういう対応をしているか、などだ。

そしてそこから、敬語で丁寧にかけるか、それとも砕けた口調でフランクに話しかけるか、などの細かい取捨選択をすればよい。ある程度、自分と相手との会話像みたいなものが出来上がったらいよいよ実践の時だ。

ここで幾つかの注意点を書いておくので、留意してほしい。

当たり前の話だが、レジが混雑しているときの店員には心の余裕がない。ましてや会話に藹々と臨めるわけがない。客を捌くことだけを考えているのだから、全うな会話が成り立つ見込みなどサラサラない。

ゆえに、人が少ないときを狙うのが正解だ。

話しかけるタイミングとしては、自分の会計中、もしくは会計後が安全牌だろう。

いわば、自分の会計時というのは、自分の持ち時間である。

その時間は、自分だけに意識が向けられるし、そのときに話しかけられてムツとする店員はほとんどいないだろう。

逆に、品出しの最中などに話しかると「仕事の邪魔をされた」と認識する店員も出てくるだろうから、おすすめしない。

次に、話しかける内容である。

言わずもがなだが、いきなり恋人は居るのかなどと不躰で直接的すぎる質問をしてはいけない。いたずらに警戒を高められるだけで、一抹の得もない。

なるべく、互いの私情に踏み込まない無難な内容が良い。「会話をする」という事実のみがこの時点では重要視されるのであって、内容はどうでもよいのだ。

よく無難な会話の一例として、「天気や趣味の話が良い」などと言われるが、コンビニ店員との接触に関しては、どちらもあまり好ましいとは言えない。

よっぽど珍しい天気だったならまだしも、いきなり見知らぬ人間に「今日は良い天気ですね」などと言われても、はつきりいつて建物の中で仕事をする店員は、返答に困るだけだ。

趣味の話に関しても、およそコンビニの会計中にするには相応しくない。

ではどういふ話題がよいのか。

敢えて、客から店員に歩み寄ればいいのだ。

つまり、その店や店の商品に対する話を振ればいいのである。

これは一例であるが、おにぎりセールをやっていたなら、「これはいつまでですか」とか「こういうセールってよくやるんですか」とか、そんな内容で良いのだ。

店員に悪印象を抱かせることなく、「会話をした」という結果を作ることが出来る。

しかしながら、一つの質問に対して一つの返答で会話が終わってしまつては、いささか「会話を重ねた」とは言いがたいので、プラスアルファで何か欲しいところなのだが、ここからは個人のセンスの見せ所であるので、私が特筆すべきは、あまり無い。

というより、これ以上書くことはない。

味気ないかもしれないが、私が書きつることは以上なのである。

結論から言うと、意中のコンビニ店員を抱けるか抱けないかは、あなたの手腕次第ということになるのだ。

完結。

解散。

——しかし、これにて指南終了！では余りにも投げっぱなしジヤーマンというが無責任であるので、以下に会話モデルを書くのでそれを参考にしつつ、改変するなりして使って頂ければ幸いだ。

以下、貴方はA、コンビニ店員はBと称す。

B「いらっしやいませ、どうぞ」

「。が一点、××が一点……」

A「あれ、おにぎりって、いま100円なんですか」

B「あ、はい。今はセール中なので、全品100円なんですよ」

A「そうなんだ。こういうセールってよくやってるんですか」

B「そうですねー、2ヶ月に一度ぐらいやってますねー」

A「そっか、ありがとう」

B「いえいえ。それではお会計、円ですねー」

A「……じゃあ。円をお願いします。袋は一緒にいいです」

B「ありがとうございます。では、円お預かり致します」
「円のお返しになります。ありがとうございました」

A「ありがとう。……ところで、しりとりしませんか」

B「えっ」

A「しりとり、しませんか」

B「は、はあ……」

A「では自分から、しりとり」

B「……リス」

A「雀の涙」

B「だ、……ダリア」

A「アナコンダ」

B「……」

） 2 h o u r s l a t e r （

A「福建省育ちのジャイアントパンダ」

B「だ、だ、……すみません、もう思いつきません」

A「嘘はいけねえぜ、お嬢ちゃん。だ、から始まる言葉が、まだ一
つだけ残ってるだろう？」

B「う……、でもそれは……」

A「別に、言いたかないならいいぜ？ けどよ、お嬢ちゃん。その
赤く火照った頬と、荒い息遣い、口に出さなくても言っちゃってる
ようなもんだぜ？」

B「っ！ このヒトデナシ！」

A「おいおい、飯にも客に対して、ずいぶんな物言いじゃねえか。
ふん、そういうことなら、帰らせてもらっよ」

B「！！！！ 待って下さい！ ……言います、言いますから！」

A「最初から素直に言ってりゃよかったんだよ。じゃあ、もう一回
やり直すぜ。 ……福建省育ちのジャイアントパンダ」

B「……」

A「ほら、早く言いなよ」

B「……だ……」

A「聞こえねえなあ！」

B「だ……、だ……、……抱いてっ！」

執筆後記

失敗した、と私は思った。

私は、真面目で優しすぎたのだ。

この意中のコンビニシリーズを書くにあたって、当初、私は読者に対して何一つとして有意義な情報をもらすつもりはなく、ただひたすらに皮肉に終始するつもりだった。

ところがだ。

何故か途中から、「少しでも自分の体験を生かした有意義な情報を、読者に提供したい」という出所のわからぬよこしまな気持ちが自分の中で芽生えた。何故か、と言ったが、それは一重に、私の善良で優良たる人柄に拠るものだろう。

そしてその気持ちは、自分の知らぬところでムクムクと肥大し、遂には私の作品にまで闖入を許すに至ってしまったのだ。

そのせいで、私の小説は大惨事である。

「本当に使える技術」を読者に提供するという、陰惨たる善人ぶりを衆目に曝すという醜態だ。

保険金殺人を犯して指名手配中に警察に射殺された父も、私の恥ずべき善人ぶりに草葉の陰で血の涙を流していることだろう。

嗚呼、情けなし。

ギリギリのところで踏みとどまって、作品をぶち壊すに至ったが、付け焼刃にすぎん応急処置である。全体としてみると、有意な小説に仕上がってしまっていることに変わりはない。

哀感遣る方なしであるが、終わったことを愚痴愚痴と言ってもしようにない。

コンビニシリーズは今号を持って終わりである。

次回からはまた、更に精進して中身の無い小説を書くことに尽力する次第である。

006 意中のコンビニ店員と、寝具を共にする方法。(後書き)

ひどいシリーズであった、と言わざるをえない。

次回から、ちゃんと日々の雑記風味にできればいいなと思います。

007 蟲毒患いし、わがポンポン（前書き）

今回は、下品な表現がありますが、
そういうのがお嫌いな方もご遠慮せずに読んでください。

また、文章も実験的な面が多いので、
いつも以上に読み苦しいかもしれませんが、
他の小説を読むぐらいならこれを読んでください。

007 蟲毒患いし、わがポンポン

一週間ほど前のことである。

私は、あまり幸せではない起床をした。

アラームのつんざく悲鳴に起こされるのも、第三者の手に揺すられて起床を余儀なくされるのも、安眠を貪っていた人間にとってはあまり幸せではないだろう。

けれど、この日の私の起床と対比するならば、それさえも相対的に幸せである。

その日、私は腹の中で何かが蠢く厭な感触で目を覚ました。

絶対的に睡眠量が足りていないはずなのに、起きた時点ですでに頭はこれ以上になく覚醒しており、そのせいでなおさらその不気味な感触が明瞭に伝わってきた。

「やれやれ、前夜に何か悪いものでも食べたかな」と思って記憶の糸をはいさはいさと手繰り寄せてみたのだが、どうにもマトモではないものを咀嚼した覚えはなかった。

ならば外的要因か、と思って寢床から辺りを見回すが、予想に反して窓はガツチリと閉まっていたし、脱ぎ癖のある自分にしては珍しく服も着たままだった。

いよいよ、私はゾツとした。

それと同時に、腹の底に溜まる何かしらも、ゾゾゾツと動いた気配がした。

人間というものは、影無き恐怖に滅法弱い。

たとえば古来より人は、幽霊や神隠しなど、正体の掴めぬ超自然的なモノに怯えて暮らしてきた。

だが、文明や科学の発展により、幽霊の正体はプラズマであると

され、神隠しが悪意ある人間の仕業だということが露見すると、そこにあった恐怖は一気に消えうせ、いまでは幽霊なんぞ滑稽の代名詞にすら成り下がってしまった。

しかしながら、である。

世界中で遍く噂あまねされている謎が、発達した文明の力によって次々と解き明かされている近世、そんな今だからこそ、まだ残る数少ない謎に、人々は尋常ではない恐怖を感じるのだ。

そしてそれは、先日の私にとっても例外ではなかった。

日常的に怪異の根源のほとんどを「プラズマだ」と言い張り、「神も悪魔もいるか」と聖書でケツを拭き、「くたばれロリコン」と神隠しを揶揄やゆし、超自然的現象じじょうの悉くを唾棄だきすべきだと考えていた私だったが、いざ自分の身に降り掛かった途端に顔面蒼白になったのだから、愚かであること恥辱の極みである。

「なんぞこれ。お腹の中で、なんかうねうねしとる。まるで、悪鬼天魔の所業だ。主よ、助けたまえ！」

こんなときだけ都合良く神に祈ったりするが、生憎その神様は自分の手でケツにあてがってしまった後だ。

ケツ神様が、なんの天恵御益てんけいおんえきをもたらししてくれるはずがなかった。

結局、私はその後三十分ほどのた打ち回った。

のた打ち回っているうちに、いつの間にか再び眠りに落ちていた様子で、次に起きたときに恐る恐るお腹を触ってみたが、何の異物感も無い、平常運転のポンポンであった。

「結局、あれは何だったのだろうか」

疑問が頭の中に残りつつも、友人との約束があつたので、身支度を済ませて家を出た。

友人宅に向かう道中にあつた教会の扉を、思い切り蹴り付けておいたことは言うまでもない。

一方的な逆恨みだと罵る者もいるかもしれないが、私はそれを否定しない。

ただし逆恨みだろうと、正恨みだろうと、恨まれる方に落ち度があるのに相違ないのだから、よって何の福音も届けてよこさなかつた教会が悪いのである。

私が最初に、神様をケツで慰み者にしたとか、そんなことは知らん。

関係ないのである。

神なら平等に人を愛せ、とむしろ説教をくれてやりたい心境ですらある。

とにかく友人宅へ向かう道中も、幼女が好きでいずれ神隠しを行わんともつかぬ友人との談義の間も、そこから帰宅する道沿いでも腹に違和感が甦ることはなかったので、私は安心してきつていた。

帰宅してからバイトに行くまで数時間あつたので、今朝無駄に早く起床した分の睡眠時間を取り戻すべく、私は再び寢床に入つたのだつた。

賢き明察をなさる読者諸氏なら、次の展開は読め読めであろう。

しかしながら、空想小説ではベタとされる展開も、それが現実のものとして眼前に展開されるとなれば、それはそれで恐ろしい、それだけで大いに恐ろしい。

推察どおり、私は再びあのゾゾメキによつて、眠りの淵に沈み込んでいた意識を引っ張りあげられた。

しかも、前にもまして相当にひどい痛みだつた。

腹の中に野犬がいて、臓腑^{ぞうふ}を喰い散らかしているかのように、鋭い多角的な痛みだった。

産みの苦しみ、という言葉がある。

たとえば出産に関して言えば、その痛みは相当なものであり、男が体験すると死ぬとすら言われている。けれど出産は、産んでいる故に痛いのである。産んでしまえばなんということはない。

痛みのベクトルが違っけれど、腹痛も同じである。排泄したいがために痛いのである。これもまた、産んでしまえばなんということはない。

では私も産んでしまえば、痛みから解放されるだろうと、そう考えるのは安直なのである。

そのときの私の痛みは、明らかに異質なものであった。何も出る気配が無かったのである。

痛みを体内から排出する術がなかったのである。

死ぬまでおさまらないんじゃないだろうか、痛みから解放されるべくは死ぬしかないんじゃないだろうか、そう思っていよいよ絶望の岸壁に立たされていた私だった。が、なんとも不思議なことに、バイトに行く直前の時間になると、痛みがフツと引いたのである。私は、痛みが消えたことに安堵するよりも、むしろその見計らったかのような引いた痛みの波に恐怖を隠しきれなかった。

いよいよ、超自然的な力がはたらいていることを、信じられずにはいられなくなった。

冒流に冒流を重ねた神の呪いかとさえ、真剣な心根で疑ったのだった。

ともかく、刻々とバイトの時間がせまっていたので、私は原付に跨ってその車体を走らせた。

バイト中、私は戦々恐々であった。

すでに、一日の内に二度起こった天変地異は、明らかに私の体力を磨耗^{まもつ}させていたし、いつ襲来するともわからぬ三度目のそれを考えるだけで、精神的にも疲弊せざるをえなかった。

バイトの節目節目でビクついていた私だったが、恐れて気を張っているときほど、恐るべき事態は起こらないことが多い。やがてバイト中にはどうやらあの痛みは来なさそうだと勝手な推測をして、私は徐々に安堵しつつあった。

いま、馬鹿だ、と突っ込んだ者。

正解である。

ホラー映画の筋書きとして、緊張から緩慢な場面に転じた後、弛^し緩した空気^{かん}のところを突如として畳み掛ける、というのは基本中の基本である。

無防備は、付け込むためにあるのだと言っても過言ではないのだ。但し、ホラー映画のプロットが現実世界に応用されること自体が異常なので、私が安堵したのは責めるべくもない話ではあるのだが人間の体というのは本能に忠実なもので、安心の境地に立ちつつあった私は、ふとその日まで何も口にしてなかったことを思い出して、急激な空腹に襲われたのだった。

幸い、ラーメン屋であるので、食べるものには困らない。

私は突如として、オーダーが入ったわけでもないのに麺場に立つて、さらには店のメニューにはないオリジナルのラーメンを作り出した。

けれど、なにもトチ狂ったわけではない。規定の三十分休憩を買って、自分が食すためのラーメンを作っただけなのである。

全然余談なのだが、基本的に飲食店のアルバイトというものは、オリジナルメニューの開発に勤しむものである。ゆえに、知り合いの働いている飲食店に行つて、「お前のオリジナルみたいなん作つてよ」というのが一番美味しいものを食べられる可能性が高い。

閑話休題で本筋に戻ろう。

ともかく、私は自分で逃えたラーメンを持って、外に休憩を取りに向かったわけだ。

肌寒くなってきた外気と、冬を待つ空の乾いた匂いに反して、目の前には湯気を立たせて濃厚な香りを馥郁する美味そうなラーメンがあるわけだ。腹はスッカラカンの空腹であり、口腔内はもはや涎で沼と化していた。

「うっし、いただきますっ」

私は小気味良い音を立てて、割り箸を割った。

ピキンと、やけにその音が大きく聞こえたことを覚えている。

それと、同時に。

私の体幹を沿って走るように、上半身の正中線を、何かが走り抜けた気がした。

その刹那あとに、腹に違和感。

夢幻の狭間の世界より湧き出たように、無限の虫たちがはらわたの表面やら内部やらを埋め尽くすように這いずり回るような感覚。

やがては各々が臓腑を目指して蠕動し、内臓をかじりつつは更に産み増え、私の体内はやがて虫で埋め尽くされる。

そして最後には体表面から浮き出るようにして虫たちが皮膚を食い破り、頬から腕から腹から足から次々と虫が沸きだして、やがて後には“私であつたモノ”しか残らない。

頭の中を不吉なイメージが充たした。

どれだけ頭を振っても、それがまとわりついて離れない。

[illegible]

1.

……はい、トイレだ。

意識が朦朧とする。

呆けた頭で私が次に考えたのは、「ハムナプトラ」というエジプトを舞台にした映画で、「スカラベ」という虫に体の内側から食いちぎられて死ぬ男の姿だった。

おそらくそれも、ありえない。

また、ウソみたいに痛みが引いていたのである。

私は便器に腰掛けていますが、いまだ排泄の兆しはない。

43

かといってこうして便器に座っていても仕方がなかった。

私は途方にくれた。

ここで粘っていても意味がないけれど、便所からわざわざ出るのも億劫だったのだ。

何もかもを諦めなくなっただのだ。

ふとその瞬間。

つと、突然にである。

腹に、違和感が。

戻る。

それは。

けれど。

はじめは虫かと思っただ。

あいつらが、いよいよ孵ったのかと。

ぴちゃり、ぴちゃりと。

尻を這うようにして垂れる。

虫が、あいつらが。

けれど。

耳を澄ますと、違っただ。

遠く微かに聞こえるそれは、歓喜の音であっただ。

ついで、地響きのような、腹の胎動。

それは生命の強さそのものを表現したかのように。

私の腹は強く、強く揺れた。

地鳴りがドンドンと勢いを増して、それに呼応するかのように私の腹もドンドンと、太鼓を打つかのように響くような感覚が私を支配した。

響く。揺れる。響く。揺れる。

呼吸のように規則的に繰り返す。

そして。

全ての音が、止まる。

つい昨日のことである。

私は、あまり幸せではない起床をした。

やけにけたたましいアラームを過剰な力を以って止め、寝返りを打つ。

むつくりと自然に起きるのを待つ以外、何かしらの介入によって起こされるのは、誰しもにとってあまり幸せとは言えないだろう。

けれど、あの日の事を思い出すと、私はこれから先は永劫に、起床の際に不幸だと感じる日はこないかもしれないな、と思った。

あの日、一日の内に私を三度も襲った新種の蟲毒は、三度目にしてその本性を表した。

なんのことはない、単純な排泄物、大便、うんこ、クソ、本質的には同じだが、呼称は数あるので好きによんでくれてよい、——それであった。

しかし、なんと形容すればよいのだろうか、強いていうなら物量、密度、体積、容積、どれを取ってみても、ただの排泄物の域を凌駕していたのだ。

いわば、ただならぬクソだった。

汚い話になるが、通常の排泄をブリブリと形容するのならば、そのときの私のそれはブリブリブリブリブリブリぐらいはあったとおもう。

道理で、腹の中を虫の大群が行進するかのような幻影にも捕らわれるはずである。

北欧神話に、ヨルムンガンド、別名をミッドガルドの大蛇、世界蛇とも呼ばれる巨大な蛇がいる。悪戯好きの神ロキと、巨人のアングルボアの間に生まれた彼は、生まれてすぐに海の底にうち捨てられるのだが、やがて海底でミッドガルドの周囲を取り巻くほどの大きさに成長し、更には自分の尾を加えることができるほどの大きさに成長する。

さて。

あのときの自分は、さながら成長しきった姿のヨルムンガンドを出産するかの如き心持であった。

排泄が始まった瞬間に私は冷静さを取り戻して、「このサイズだと便器が詰まるやもしれぬ」と考え、クソを出しながらにして水洗レバーを捻ったのだが、実に三回レバーを捻ってその水が流れ終わるまで、クソが止め処なく出続けたのだから、恐ろしい。

今にして思えば、あれはほんとうにヨルムンガンドだったのかもしれないとおもう。

兎にも角にも、斯くして私は、蟲毒という名の幻覚から醒めたわけだ。

しかしながら、実をいうと、いまだにあのヨルムンガンドの原因はわかっていない。

あの日の前日、私はキッチンと排泄行為をしたはずだし、悪いものを食べたおぼえも、やはりない。

では、あの物量のクソは、どこから湧いて出たのだろうか？

はたまた、本当に腹の中に蟲が湧いていて、それが排泄物へと姿を変えたのだろうか。

「馬鹿な」

いつの間にか、私は以前と同じように超自然的現象に懐疑的になつていたので、信じるべくもなかった。

では、なぜ？

真相は闇である。

闇は、探らないに限る。

そして私は現金な人間であるゆえに、原因などどうでもよく、とりあえず解放されたという状況こそが大事なのであった。

なので私は、上機嫌でバイト先を後にすることが出来たわけである。

帰りしなに、もうすぐ来たるクリスマスに対する憎悪の前借り分も含めて、教会の扉を三度四度蹴り飛ばしたのはいうまでもない。

その瞬間、ナニモノかが私を背後から、凍てつく様な視線で突き刺すのを感じた気がした。

けれど、私は神の存在なんて信じないのだ。

008 「なんにもない」が、ここにある

雑記である。

元々、淡々と日常を綴るつもりだったのに、二話目以降、内容と文章量ともに少し膨らませ過ぎたというか、作者自身が自分の文章に対して食傷気味である。

こういう風にたまに、時折、しばしば、いえいえもはや日常的に見られる文章の暴走行為は、ひとえに作品のプロットを作っていないという理由に帰結するだろう。

しかし、それで責められても困るのだ。

プロは小説を書く際に、恐らく必ず全員がプロットを立てるだろう。

しかしながら、仮に文章のプロといえども、日記を書く際にわざわざプロットを立てる人間がどれだけ居るだろうか。

そういうことである。

これも言わば日記みたいなものなのだから、プロットを立てる必要はないのだ。

日記であるために、プロットは立てない。

これは当たり前のことであるし、この前提に反論しようものならば、作者はガムテープをむんずと掴んで貴方の家に赴かなければならなくなるので、この点に対しての反論は遠慮されたし。

問題は、この日記を書くにあたっての当初の目的とこの作品の存在意義だ。

そもそもこれは、冒頭でも説明したようなしてないような曖昧な気もするが、文章の練習のために連載を始めたようなものだ。

少なくとも、毎日文章を書くという点にのみ絞って考えれば、内容が如何であれ悪いことではない。

けれど、文章の練習とは、小説家を目指す以上は小説の練習とも言換えることができる。

小説の練習なのに、プロットを立てる必要が無いジャンルを選んでしまったのは、大失敗と言っしかない。しかもこれに気付くまでに八日も要した自分に、むかつ腹である。

思わず壁を殴ろうにも、業腹（いっは）の度に壁を殴ってきたので壁はもはや百戦錬磨の威風、端的に言えばすでに穴だらけなのであったからして、もはや殴る壁もない。

「いったいぜんたい、どういっ了見か」

攻め立てようにも、考えたのも自分であるからして、鏡に向かって問いかけるしかない。

もちろん、鏡の中の自分に返答を望むべくもない。
どうすればよいのか。

もう一つ、このジャンルを選んだことに関して失敗がある。

作品とは、それがどれだけ支離滅裂で無茶苦茶な内容であっても、まずは完結させることに意味があるのだ。

「百の作品を書き出すより、先ずは一つを完成させなさい」

そんな言葉も有ったり無かったり。

つまりね。

日記は、どうやっても完結しないのだ。

それこそ、作者が不慮の事故か、猟奇殺人事件の末端になるか、いずれにせよ命を落として書くことができない、という状況まで完結しないのだ。

「では、僭越ながら申し上げるが、死ねばよいのではないかクソ作者殿」

そんな声も聞こえる気がするが、私は耳を塞ぐ。
死んでしまえば元も子もないではないか。

と。

こんな風に書くと、読み手によってはただの愚痴の羅列に見えるかもしれない。

「やはり、いますぐ死ぬがよいよクソ作者」と思つかもしれないけれども、残念ながらそれは、貴方が文章の本質を見抜けない浅はかな人間であることの証明である。赤面して枕に顔をうずめてジタバタするのがお似合いだ。

クソ作者曰く、カス読者、といったところである。

なぜならば、懸命な諸氏ならば言うまでもなく理解されているところだろうが、何も私は愚痴に終始するつもりで筆を取ったのではない。

人間は、必ずしも立ちふさがる問題を乗り越えようとする、素晴らしい生き物である。

私に関してももちろん同様である、どころか、普通の人間以上に熱い闘志を抱き日々の鍛錬をこよなく愛する人間なのだ。

邪魔な障壁を叩き壊そうとしないわけがない。

あくまでまだ「ここに、こういうという問題があります」と提起した段階ではない。

当然の如く、次には「それでは、その問題をどうやって解決しましょうか」という、前向きで建設的な気持ちの良い快文が続くわけである。

……どうしよう。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

解決方法が見つからない。

どうしようもない。

作者は、読者の期待に沿う形で誇り高く自決する気もなければ、連載を途中で投げ出すような醜態を曝すつもりもない。かといって

日記という形式をいまさら変える気もなければ、ましてや日記を書く上でプロットを立てるなどという愚の骨頂を犯すわけ気にもならない。

うつむ。

インターネット上の無料サイトに小説形式の日記を投稿する彼は、苦悶に表情を歪めた。

一体どうすればよいのかと、誰にも聞こえない悲鳴を上げ懊悩おつのうした。

電子の海をもがいてみても有用な情報は見つからず、彼は頭に手をあててしゃがみこむよりなかった。

時の流れは如実であり、かつ残酷である。

彼が呻吟しんげんし始めてから、時計の針は明々と悪意を見せ付けるかのように何歩飛ばしかで進んで、今では夜も更け丑三つ時を示しつつあった。

そのときである。

彼の頭の中で、何かが一閃した。

彼の断末魔にも似た祈りは、もしかするとどこかの神が、またはそれに等しい存在に届いたのかもしれない。

とにかく彼は立ち上がり、飛び掛かるようにして学習机を漁り散らかすと、やがて太く赤い書物を取り出してニタリと笑った。

鮮やかで堅固な赤い表紙には、これまた綺麗な金色で、「三省堂国語辞典」と印字されていた。

さきほどとは打って変わって、彼は落ち着きを取り戻していた。余裕綽々といった具合に口角を緩ませながら、すこしづつページを捲る。

やがて、彼の目は辞書の中の一点に注がれ、ページを進ませる手が止まった。

私は、見つけたのだ。

日本語には便利な言葉が沢山ある。

しかし、私の現状に、これ以上までに有意義な言葉は存在しない。
溺者に浮き輪である。

現状をどうにかしたいという意志を持ちながらに、打破すべき手段が見つからないときの奥の手として、私はこれを用いようとおもう。

臭いものに蓋をする――【抜本的な対策を講じないで、不都合な事態を一時的に隠そうとする】

009 LIVE、ライブ、生きる（前書き）

完全に個人的なライブレポになってしまった。
すいません。

009 LIVE、ライブ、生きる

あの隔絶された音の有象無象の世界へ足を踏み入れたのは、実に一年ぶりのことだった。

ライブハウス。

馴染みのない人間が想像するのは、赤錆びて重厚な扉を押して地下への階段を潜る、そうするとそこにはミラーボールに照らされて踊り狂う魑魅魍魎が跋扈する、まさにアンダーグラウンドといった世界かもしれない。

けれど、私の住まいから最寄にあるライブハウスは外観こそ煤けて黒がかった灰褐色の容貌だけれども、中に入ってみれば瀟洒さの漂う造りになっており、さらにいえば地下通路ではなく上り階段を登ることで異世界に到達する。

しかしながら踊り狂う魑魅魍魎は確かに存在しているので、当然らずも遠からずな想像であると言っておこう。

私は基本的にライブハウスの雰囲気が大嫌いだ。

といえば語弊があるかもしれないが、少なくとも私が過去数十度と足を運んだイベントにおけるライブハウスは、総じて憎悪の対象である。

というのも、ライブハウスに入ってすぐ目に付くのが出演者同士、もしくはそれに常連も加わった身内の馴れ合いである。扉を潜って入ってきた新顔には、もれなく彼らの好奇の視線が一手に刺さる。

これは由々しき事態であると、私は思う。

仮に初めてライブハウスに行く者がいるとしよう。

初めてなのだから、もちろんライブハウスというのがどのようなところであるのかは、架空の話から推察するなり想像を膨らませるなりするしかない。期待や興奮もあるだろうが、そこには確実に不

安や心配も入り混じるわけである。

そんな中潜った先にあるのが、すでにライヴハウス常連の重鎮ですよ、と得意気な顔をした何やら派手な連中からの視線なのだ。

こんな非道い洗礼を、なぜ娯楽のために来たはずの空間で受けねばならないのか。

さらに悪夢は続く。

バンドとバンドの演奏の間に、次のバンドのためにステージ上をセッティングする時間があるわけなのであるが、その間も、やはりすでに知り合い同士の身内で固まってしまったために、新顔の入る隙間がない。

孤独である。

これほどまでにない疎外感である。

頻繁にライヴに行っていた頃は、よくこの疎外感に苦しんだ。

あれだけ必死にチケットを売り捌こう、人を呼ぼうとしていたにも関わらず、いざ出向いてやれば「おう、来てくれたんや。ありがとう！」とそんな安易な言葉だけでまるで謝礼の全てを済ませたかの如く再び身内の輪に戻る彼ら。

取り残された自分の惨めさたるや、ない。

確かに私が社交的な人間でないというのも理由の一つである。大きな理由である。それはわかっている。

けれど、だからといって何故好意で足を運んだ私が、これほどまでに惨めな思いをしなければならなかったのか、思い出すだけで苦虫の味がする日々である。

そんなこんなで私は、強引且つ乱暴な手段でチケットを売り捌こうとしていた彼らが、卒業式のように年を追ってバンドを引退していったのを機に、ライヴから長い間離れていた。

しかしながら今日、久しぶりにライヴハウスに足を運んだのだ。

それは、私の友人、夢追い人である彼が久しぶりに地元のライヴ

ハウスで演る、ということ聞いたのと、いままで誘われる度に無碍に断るということが続いていたのでそれに対する罪悪感も少しはあっただろう、とにかく彼を見るためにライブハウスに言った。

久しぶりに入った箱の中は、やはりかつてと全く同じ雰囲気だった。

「同族ではない異物である何か」を見つめるような視線は、例に漏れず私の瞳を突き抜け、直接に脳髓を突き刺した。

けれど、私は以前のような不快感や疎外感をおぼえることはなかった。

きつと、その視線を放つ彼らが自分より幾分か若かった、という点で精神的な余裕が出来たからだと思う。とにかく、それはよい兆候だと思った。

悠々とドリンクを飲みながら、始まるまでの間に煙草を吞みつつ回りを見渡すと、やはり若年層の者が多かったので、逆に場違いで恐縮するような気恥ずかしさに襲われもしたが、それでも以前のようにならぬに喰い散らかされそうになるような恐怖感はなかった。

そうしているうちに、ライブの幕は開く。

一つ目のバンドは、スリーピースのギャルバンドで、一見すると女子高生のようなであった。

というのも彼女らは制服を着ていたのだが、そのデザインがてんでバラバラで尚且つ学校で指定されているものにしてはデザインがいかんせん派手であったので、女子高生ではないのかもしれないと思ったわけだ。

案の定、大学一回生の音楽部であり、制服は嗜好になぞらえて着用しているだけだったので私の推測は正しかったわけだが、技量の

みに着眼すると完全に高校生のそれであって、大学生の水準には程遠かったため、私の推測はやはり外れていたとも言えるかもしれない。

とにかく、二つ目のバンドについて特筆すべき点は、何一つとしてなかった。

私は肩を落とした。

以前までは、疎外感によって鬱屈することの多かった反面、どんなに稚拙な音でも楽しんで体を揺らすことが出来ていたのだが、今の私にはそれが出来なくなってしまっていたのだった。

つまらない。

率直な感想だった。

感情の揺れに同調するかのようには踊り狂っていた私はいずこへ。

二つ目のバンド。

同年代ぐらいの男のスリーピースバンドであり、ジャンルで言えばオルタナティブロックか、もしくはガレージロックに近い何かも感じた。

以前に何度か聴いたことがあったしそれなりに好きだったこともおぼえていた。

けれど進んでフロアへ出る気にはなれずに、やはり座上で煙草をくゆらせながら眺めるのみであった。

なるほど、私が聴かなかった間にさらに技術は研鑽され、音楽性も洗練されていた。

個人的には好きだ。

好きの上に大をつけてもかまわない。

けれど、埋もれるだろう。

陽の目を浴びることは恐らく、ない。

それが僕の厭世的な気持ちを加速させた。

このままライブハウスを飛び出て死んでやるつか、そんなことす

ら頭に浮かんだ。

自分の好きなもの、認めるもの、それが世間様の評価を得られないということはなかなか悲しいことであるし、ひいては自分自身を否定されているような気にすらなった。

三つ目のバンド。

これまた同じぐらいの年代で、ギターボーカルとドラムは男で、ベースは女。

聴き出しはなんともありがちで、凜として時雨のパクリかとさえ思ったが、それは私の耳がフシアナだったらしく、もっと柔和な別物であり、聴いているうちに私は音に魅了された。

しかしながら、パフォーマンスについてはなんともいえない。

あの、目を大きく見開いてマイクにかじりつくような歌唱法、ギターを持ち跳ね回ってはステージの下に下りてくるスタイル、その行動原理に本当に感情が込められていれば文句はないのだけれど、「どこぞのバンドがやっていてかっこいいから真似した」みたいな匂いが鼻について仕方なかった。

ベースの女子の長く伸びたストレートで少しボサボサの頭も、「見て見て退廃的なアタシかっこいいでしょ」的な何かを感じてしまつて、陳腐に思えた。

私が歪な受け取り方をしているのだということは、わかっている。けれど、鼻につく。
正直な感想である。

四つ目のバンド。

ボーカルを殺してやろうかと思った。

彼女は、媚であった。

媚以外のなにものでもなかった。

キンキンと頭に響いてうざったい劣化した大塚愛みたいな歌声と、醜いトロールに花嫁衣裳を着せたような容貌については何も言わない。

しかしながらだ。

あの媚を孕んだステージ上での動きと、肉欲丸出しの嬌声には苦言を呈さずにはいられない。

恐らく意識的にやっているのだろうが、ステージで彼女が動くたびにわりかし豊満な乳が揺れ、男の客の視線はそこに集中し腕を突き上げるのだが、ちゃんと音楽を聴きに来ている客や女性客は閉口していた。

バンドは音楽を売るものだと思っているが、あのバンドに限っては乳を売っているといっても過言ではない。

なにやらファンタジーな名前のバンドだった気がするが、今すぐバンド名を乳に改名した方がよいのではないかと私は思う。

顔や体で客を集めるのが悪いとは言わない。むしろ商業的にはそれが正しいとも思えるし、結局売った者勝ちという側面は、資本主義である以上は否定できない。

けれどそれも、最低限の質の音楽が伴った話である。

あそこまで露骨なやり方をするのならば、むしろ音楽は捨て置いてグラビアなどで乳を堂々と売り物にすればよいのだ。

もっとも、トロールの垂れ下がる乳などに商業的価値があるとは思えないので売れないだろうが。

五つ目はバンドではない。

シンガーソングライターである。

更に言えば、当初の目的である友人だった。

二つ、三つ目のバンドでそれなりにポルテージを上げることができたのにも関わらず、四つ目のそれで気分をぶち壊しにされた僕にとっては、救いの手であった。

これから綴る感想は、もちろん友人であるから臍負が生じる。

臍負が生じるけれども、臍負目なしに見ても今日で一番楽しかった、ということだけは力強く言っておきたい。

彼の音楽は、自然そのものである。

もう少し噛み砕いて言うならば、彼の音楽を聴いているとき、私は自然の中に放り出されたように、無垢で、無防備で、そして肩の力の抜けた自然な状態にさせられた。

音楽とは、音が鳴る以上、程度の差はあれどうるさいものだ。

けれど彼の音楽は、いわば静寂そのものであった。

静謐さをたたえたその音楽を耳にしながら、私は沢山のことを考えた。

これは異常なことだった。

基本的にライブに行くと、私は頭を空っぽにして踊り狂うのである。

ところが、彼の音楽はその逆で、私にあまたの思考をもたらすのである。

音楽を聴きながら頭を張り巡らせることができるぐらい、彼の音楽は自然と同義なのだった。

そして、媚びない音楽だった。

彼の音楽とはすなわち、彼自身の苦悩であり、彼自身への応援歌であり、彼自身の希望を歌った者だ。

媚びないゆえに大多数の人間の支持を得ることはできない、けれどもひとたび共感した者にはなにもものにも代えがたい力強いメッセージとなり得る、そんな音楽だった。

筆舌に尽くしがたいものを、筆で表す表現を私は知らない。

筆舌に尽くせぬというからには、そもそもそんな表現はないのだろうか。

だから私は残念ながら、こう言うことしかできないのだ
素晴らしかった。

さて、完全にライブレポになってしまった。

もう少し何かしらの要素を入れたいところだが、なにぶんすでに一話としてはかなりの文章量になってしまっているので、あまり良い引き方ではないが、今号はこれにて終わりとする。

010 とりあえず二桁の大病ですけれども

私の乱文も、いよいよ二桁の大病に乗った。

つまり、少なくとも10日続けて記事をアップし続けたわけなのだが、ここらへんで一度、更新のペースを落とそうと考えている次第。

私の乱文、と書いたけれどなぜ乱文になるのかというと、私は自分の書いた記事を読み返さないからだ。正確に言うと、読み返せないのだ。

たまに例外も居るかもしれないが、基本的に人間が一日に与えられる時間は二十四時間だけである。そして残念ながら、私はその例外の方ではなく、至って普通の人間だ。

ゆえに一日、二十四時間。

そしてその二十四時間のうち、この連載に充てられる時間はそれほど多くない。

暇な日もあるにはあるが、一日に二十時間ほど働いている日もある。

実は連日投稿というのは名ばかりで、空いている日に2、3話をダラッと書いてしまい、後は投稿時間を予約して自動で投稿してくれる機能を使っているのだ。

そして、空いている日でも、全部この連載に時間を充てるわけにはもちろんいかない。

ゆえに、全ての記事に対して、書いて、読み返して、推敲して、というプロセスを踏むというのはなかなか容易ではない話なのだ。

そして、読者諸氏に対する懸念もある。

何も忙しいのは、私に限ったことではない。むしろ、私よりも日々に持ち時間を忙殺されている人間の方が多いかもしれないし、読

者の中にその類の人間がいなくても限らない。

そうすると、あの文章量を毎日読むのが苦になる人間も必然的に多くなるだろう。

私は、それを良しとしない。

あくまで空いた時間に読んで頂いて少しでも口角を緩ませていたできれば幸い、といった程度のもので、日々の浮薄ならざる貴重な時間を空費させるのはあまりにも申し訳ない。

そういった事情により、更新ペースを落とそう、と思った次第である。

もしかしたら更新ペースは落とさずに内容を減らして、というか小分けにして相対的に読書量を減らすという手段になるかもしれない。

そのへんはまだ曖昧だが後々決めていくとして、とりあえずは読者の負担を減らしたいというのも私の切なる願いである。

だから、である。

どうか「もうめんどくさいから、読まねー！」というのだけはやめてほしい。

私の書く、時として悪文、時として怪文、時として乱文、時として駄文、を貴方の傍で娯楽という形でより添わせて続けてください。なんて書くとプロポーズじみていて気持ち悪いのである、ハハッ。

ちなみに、次のエントリーあたりから、私の恋愛に関する吐露をしたりしなかったりするかもしれない。

「おまえら、どうせ恋バナが好きなんだろ？ おまえらの好きそうな話書いてやるから読めよ」という筆者の心の声が聞こえた方、それは間違いである、筆者はそんなこと思っていないし心の中で言ってもないのだよ。

だけでも、読んでね。

と、これだけはいかんせんしまりのない記事になってしまうので、先ほどのこと。

パソコンでツイッターに「私、コンビニ店員だけど」という出だしで文章を書こうとしていたのだが、誤って「てんいん」と打つところを「ていんいん」と打ってしまっていたらしい。

しかし私はそれに気付かずに変換した。

すると「ていんいん」は「手陰々」に姿を変えた。

私は思わず噴出した。

圧倒的いやらしさ……ッ！

なにか自然界の範疇を超えた大きな存在が介在したことを感じた。しかしながら、「手淫々」や、もしくは「ていんていん」にならなかっただけマシだ。

というような上記の内容を包み隠さずに、半ば得意げな顔でツイートしたんだけど、リツイートはおろかりプライすらなかったのだから私は愕然として肩を落として苦し紛れに、

「“人の不幸は蜜の味”という言葉を知ってから、熊のプーさんが他人の不幸を貪る黄色い悪魔にしか見えなくなっただけ」とも書いてみたが、やはり反応無し。

とりあえず二桁の大台ですけども、盛大に滑ったようです。

011 いわゆる、恋バナ

人は恋に生きる喜びを見出し、恋に憂い、また時として恋に死ぬ恋、とはロマンの欠片もないことを言ってしまうえばすなわち、人間における種の保存の過程でしかないのだろうか、それでも人はその本能を様々なドラマで彩ることによってときには美しく、ときには醜く、その恋をロマンスとして描き出してきた。

男と女が出会えば、その出逢いの数だけ恋の物語は生まれる。

そしてその物語の面白さの如何いかんに関わらず、人は他人の恋模様を知りたがるし、また自分の恋について話をしたがる。

それはもちろん、私とて例外ではないのだ。

私は、自我の確立、もしくは精神的な成熟と言い換えても差し障りないが、それが人より早いと思っていたし、今でもそう思っている。

けれども恋愛面に関していえば、一般的な平均値に比べて大分に遅れを取っていたこともまた厳然たる事実である。

そもそも私は、女子と喋ることができない人間だった。

これは分かる人には分かるし、分からない人にはその感覚を上手く説明するすべがないのだが、とにかく異性と会話をしようとする
と異常に緊張してしまったため、言葉少なに会話をすることしか出来
なかったのだ。それはもはや、会話とすらいえなかったかもしれない。

シャイボーイだとかそんな可愛げのある生易しいものではなく、
もっと生々しい現実味を帯びた切実な問題だった。

もつすぐ二十歳を迎えようとしている今、最近になってようやく
その症状も緩和されてきたように感じるが、それでも普通の人より

はぎこちなくて会話に齟齬が生じるため、やはり女の人と話すのは不得意分野であることに変わりはない。

さて。

最近になってようやく異性と話すことが出来るようになったはずであるのに、恋愛の遍歴もクソもあつたもんじゃないだろう、というツツコミは悲しきかな、妥当中の妥当である。

つまるところ、私がこれまでに重ねてきた恋愛遍歴はいわば虚構であり、恋愛の皮を被った偽物の何かでしかないのだ。

けれど寛容な気持ちで、仮に今まで積み上げてきたそれを恋愛だと認めるのなら、しかしそれはそれで混じり気のない純度の高い敗北の歴史であるとしか言いようがない。

一言で言うなら、悲惨だ。

二言で言うなら、悲惨で、陰鬱だ。

知りうる限りの言葉で形容するなら、暗鬱であり、暗澹であり、鬱屈であり、陰惨であり、惨憺であり、艱難であり、辛苦であり、剣呑であり、錯綜であり、呻吟であり、……これに続くマイナスイメージの語彙があと七十ぐらいはあるだろうが、きりがないのでやめておこう。

つまり私の恋愛歴は、哀感漂い涙ナシには語るこのできない哀史なのだ。

読者諸氏よ。

悔し涙を垂れ流しにして地を四つん這って頭を土に擦り付ける、そんな私の無様を笑うがよい。大きな口を開けて哄笑すればよい。嘲笑してもよいし、苦笑してもよい。

笑え。^{わら}

晒え。^{わら}

嗤え。^{わら}

語る私の方は涙なしにはおれぬと言ったが、読み手もまた笑いに
咽び流す涙なしには聞いてはおれぬだろう。^{むせ}

ハンカチとちり紙を忘れていないことを、まるで遠足の前日のご
とく入念に確認するがよい。

012 いわゆる、恋バナナ

私がどれほどイケてない、モテない、やれない、ないない尽くしの人間かというのは前号をお読みの方ならば説明を要しないだろう。しかしながら驚くなかれ、私の恋愛の歴史の第一歩目はなんとも奇妙なことに、告白される側から始まった。

小学一年か二年のことである。

私は近所の公園で友達と、なんだかチープなゲームボーイのシューティングゲームに興じていた。

するとそこへ、同級生の女の子の二人組が現れた。

一人は保育園から同じだったのでよく知っている顔だったが、もう一人の方はそこまで親しい間柄というわけでもなかった。

それに気付いた私と友人は挨拶をすると再び液晶に目を落とした。私はてっきり、彼女らは何処かへ行く途中に通りがかっただけであり、そのまま目的地へと足を運んでいくものだと思っていたのだが、どうもしばらくして顔を上げるとまだそこに佇んでいる。

いま思い返すと、彼女らの目的を考えた場合それでは辻褄が合わないもので、もしかしたら元から遊ぶ約束をしていたのかもしれないが、幾分時間を遡った先の話であるので、記憶に齟齬は付きものだ。

「何しとるん？」

私のだったかそれとも友人の方だったかは定かではないが、とにかくどちらかが彼女らにそう声を掛けた。しかし、彼女らはソワソワとするだけで何の返答もしない。

私たちの興味の対象がゲームボーイから彼女らに変わったのは言うまでもないことで、私たちは拳動不審げに立ちすくむ彼女らがど

ういう行動に出るのかをぼんやりと見守っていた。

やがて、よく知った顔の方が片割れの子に、急かすようにして話しかけた。

「ほら、早く行って来^きいよ」

「えー、でも……」

「いいからもう、ほら！」

いまにして思えば何度も物語の中で見かけたようなベタな展開、光景であるが、当時の私にとっては初めてみるやり取りであり、これからのようなことが行われるかなんて予想はもちろん付かなかった。

あまり馴染みのない顔にくつついた、これまた馴染みのない目から放たれる視線^{レーザービーム}が私の方に注がれていたので、思わず私のそれは彼女のものと交錯した。

彼女は視線を逸らさずに私の方へと歩を進めてくる。

彼女の大きくて丸い瞳が映し出した私は、かぎりなく無表情だった気がする。

「筆者くん、好きだよ」

彼女の言い放った言葉が、私の耳を通って脳随に突き刺さり、何かしらの電気信号を送られたのか体中が痺れ、やがて電熱で心が溶融していき――。

なんてことはなく、その言葉を受けても僕はほとんど無感情に近かった気がする。

強いて言うならば、照れ、に近い何かを感じたかもしれないが、それでも嬉しいだとか興奮だとかそういう積極的な感情を抱かなかったということだけは、はっきりと断言できる。

結局、彼女の言葉を受けた僕は、曖昧に、うん、とだけ返すと、まるで彼女への興味を削がれたかのように視線をゲームボーイの方へ落とすべくして落とした。

今にして思えば、残酷だと思う。

私は、結果至上主義者である。

なので、あくまで過程にしか過ぎない「努力した」ということ自体を評価するのはあまり好きではない。

けれど、それでも。

勇気を出して告白をした相手に、無味乾燥した「うん」という一言しか返さないのは、どちらかといえば正しい行動ではなかったように思える。

「……うん、じゃなくて！ どうなんよ」

彼女本人だったか、それとも付いてきた方の子が言ったのか、それはもはや記憶するところではないが、そんなことを言われた気がする。もちろん、そういうことを言われるのも当然だと今では思えるが、当時の私は、「どうといわれても、どうともない」ぐらいにしか考えてなかったのだろう。

「別に」

その一言で、全てを終わらせてしまった。

そこに居た人間みんなが心の中で僕を責め立てているような、あまりぞっとしない空気が場を満たした。

「なんでこいつが好きなん？」

居た堪れなくなったのだろうか、私の友人が告白してきた当人に聞いた。

数秒の沈黙が流れる。

「……優しいところ」

皮肉なことだと思う。

優しいからと惚れた人に告白して初めて、その人が実は優しい人間ではなかったということを彼女は知ったのだから。

曖昧な記憶によれば、その場はなんとなくそれで解散になった気がした。

もちろん、私と彼女についての後日談などあるべくもない。

彼女に限っての後日談であるが、彼女は私に告白したすぐ後、別の「優しい」男の子に告白して、そこでは両想いということになったらしい。

もっとも、曖昧な記憶の中のさらにぼんやりとしたところなので、彼女が私と彼、どちらの「優しい男の子」に先に告白して、どちらに後に告白したのか定かではないが。

もしかしたら僕の方が後だったのかもしれないが、断定はできない。

なににせよ、彼女は小学校二年だか三年だかのときに転校してし

まったので消息不明であるし、これからの人生で邂逅することも恐らくないだろう。

余談だが、彼女に告白された彼に、高校生か大学生ぐらいになったころに彼女のことを覚えているかと聞いたことがあるのだが、彼はきっぱりと「覚えていない」と言った。別段、過去を恥ずかしがって隠し立てしているような雰囲気もなかったので、本当に覚えていないのだろう。

もしかするといまでは告白した当人すら覚えていないのかもしれないし、はたまたあまりにモテない僕の歪みから生まれた妄想だということすらありえる。

しかしながら、そんなことはどうでもよい。

別段、綺麗な想い出であるということもない。

僕がこの時のことを振り返って出てくる言葉は、やはりあのときと同じように「別に」というぐらいのものなだけから。

013 いわゆる、恋バナナナ（前書き）

なんか色々とよーわからんくなってた。

013 いわゆる、恋バナナナ

小学校に入学して一年経つか経たないかのうちに愛憎劇の舞台に立たされた私だったが、最初の役を演じ終わって一旦舞台袖に引き戻されると、驚くほど長い間、私は聴衆の前に姿を現すことはなかった。

端的に言えば、小学校を卒業するまではもちろん、人間が最も多感であり飢えた肉食獣の本性を顕著に現す中学時代さえもすっ飛ばして、次に表舞台に立ったのは高校一年の冬であった。

確かに、中学生のときに友人との雑談で「。。。が好き」ということを言ったことはあるし、私はその人に対して好意的であったことは否定しない。

けれどそれが明確な恋愛感情であったかと問われれば、力強く否定せざるを得ない。

なぜならば、私はどうやら好きになった相手には気持ちをつづずにはおれない性分であるらしい、ということが十九年生きるうちに把握できたので、逆説的に言えば、好きと伝えるに至らなかった時点で恋愛感情を抱いてはいなかった、という証明になる。

それに加えて、高校生のときからの恋愛は、いま振り返ってみても「確かに自分はあるとき、あの人のことが好きだった」とはつきり言えるレベルであるが、中学時代を顧みても「うーん」と唸るより他ないので、やはり高校生になってからが実質の私の恋のスタートであると言えよう。

さて、これより読者お待ちかね、敗北の歴史語りの始まりだ。

何が嬉しくて、思い出すことさえ忌々しいトラウマの数々を掘り返して書かねばならないのか。

プロの作家として金銭を得ているわけでもないのに、なぜプライ

ベートの、それもトイレの次ぐらいに恥ずかしい、極めて恥辱的な部分を切り売りせねばなんのか。

それも一重に、私が読者に楽しんで欲しいというサービス精神の賜物であることだけは、ゆめゆめ忘れらぬようお願い致す次第である。

……人の不幸は蜜の味だなんてよく言うけれど、私の不幸を甘美な糖果のごとくくれると舐めるだろう人間が、総じて虫歯になりますようにと祈らせて頂いて、やっと長い口上を終えて本編に移らせていただく。

なお、文章の練習という便宜上、三人称視点で綴らせていただくので冗長になりがちかもしれないが勘弁頂きたい。

もしも「勘弁できぬ！」という者があるならば、逆に私はそんな人間を勘弁せずに、私の高邁な理想に着いて来られなかった負け犬として切り捨てるので覚悟なさるよろし。

登太郎が恋愛に対して思い上がった考え方をしていたのか、それとも卑屈になっていたのかは判然としないが、彼はさして恋愛に興味のあるタイプではなかった。

彼の身の回りの友人が、やれ彼女が出来ただの別れただのと騒いでいるのを、彼は感嘆するわけでもなければ蔑むわけでもない、冷静な目で一步引いたところから眺めていた。

どういう思索の過程がそこにあったにせよ、「自分にはあまり関係のない話だ」と漠然と思っていたようであった。

それは彼が、生まれてこの方持っていた女性に対する苦手意識に起因するかもしれないが、かといって彼が女性との情事に関する一切の期待を捨て去ってしまったわけでもない。

いつかはそういう日が来るだろうとなんとなく思っていて、だけれども今現在の自分には時期尚早である、というのが最終的な決断だろう。

少なくとも、高校一年の秋、現在の彼はそうであった。さて。

彼は他人の恋愛話に自分から積極的に関わろうとはしなかったけれど、かといって友人の恋愛を手伝うのにやぶさかではなかった。彼の友人、出席番号が彼より一つ早く、剣道部に所属する坊主頭で、さながら筋肉を付けたじゃがいものような川田君は、とある女性に恋をしていた。

川田の恋が始まったのは、鬱屈とした夏の始まりごろだった。

どうにも雨を司る神様が、誤って梅雨の雨に混じって恋の矢尻を落としてしまったらしく、それが運悪く川田のじゃがいもみたいな脳をブツ射したようなのだ。

川田は、疾^{はや}かった。

「俺、石上さんが好きやねん」

「おお、そうなん。応援するわ！」

「ありがとう。頑張るわ」

こんな会話の一週間後には、川田は玉砕していたように思う。

もちろん登太郎は応援するなどと言いながら応援することはなかったが、それは決して彼が川田との約束を反故にしたわけではなく、応援する間もなく川田が特攻してペシャンコになったというだけの話である。

登太郎と川田、そして川田の慕情をまるで豆腐のように容易く噛み砕いた石上さんは同じクラスであった。

石上さんは少し小柄で色白、そしてどこか獵奇的な雰囲気漂わ

せており、うすら笑む口元にはいつも妖艶さがあり、病弱そうな女子が好きな男は例外なく彼女を犯したいと思ったことだろう。

実際問題、石上さんは他のクラスからもそれなりに人気があったようで、廊下を歩けばたまに「石上」という名前が聞こえるほどで、地味な女の子の多かった彼のクラスにおいてはいわゆる高嶺の花であった。

深紅の薔薇の如く咲き誇る石上さんに、やたらめったら肉感の良いやがいの川田が種を植え付けようとしたことは、それだけで勇気のある大いに讃えるべき行動であったが、しかしながら無謀であったとも言わざるをえない。

かといって、ブラッディローズ石上嬢に特定の恋人が居たかという、そういうわけでもなかった。なので川田も諦めるに諦め難かったらしい。

「おれ、もうちょっと頑張ってみよかな」

「無茶だ、無謀だ、無理だ。所詮、いもと薔薇なんぞ相容れぬ運命」
「かといって、初志を貫徹せぬまふらふらと不埒な輩に成り下がるのは耐え難し」

「……川田よ、辛い闘いになるぞ？」

「さりとて、挑まん。じゃがいもはガツシリと土に根を張り、忍び難きを忍んだ後に芽吹くものだ。——もしも敗れたならば、それはそれで土に還るまで」

ガハハハと川田は豪放に笑って、戦地へと赴いた。

彼の背中はいつになく大きく見え、登太朗は彼のことを心の中でこっそりメイクインと呼んで畏敬した。

さて、登太朗は考えた。

今度こそは川田の役に立たねばならぬと。

もしも再び川田が敗れることがあっても、せめてもの介錯ぐらいは自分がしなければならぬだろうと。

登太郎はようやくと重い腰を上げて動き出した。

石上さんと登太郎はほとんどいつていいぐらい共通点が無かった。しかしながら、選択科目の芸術の授業で、彼女と彼は同じ美術を選択していたのだ。

そしてその美術の教室で、彼女と彼は斜め前と斜め後ろの席順であつたので、話をするのに困難はなかつた。

登太郎は何気ない世間話をする過程でなんとか川田の役に立つ情報を引き出そうとしたが、なんとも奇妙というか、石上さんとは話が噛み合わなかつた。

登太郎が会話の中で何かの確信を掴もうとするたびに、飄々《ひょうひょう》と避けられては言葉尻をつままれる、というように妙な会話が出来上がってしまうのだった。

けれど、自分の思い通りに進まない会話がなぜか嫌に感じなかつた登太郎は、なるほど、川田はこういう珍妙な魅力の虜になったのだな、と一人納得した。

「川田よ、面目ないが有益な情報を彼女から引き出すことはできなかった。しかしながら、君が彼女に惚れた理由みたいなものは何となくわかつたぞ。ふわふわして掴みどころのない、魔女的なところが好きなんだろう?」

「いんや、顔」

そんなこんなで、川田は再び撃沈した。

川田はもはやじゃがいもと云うよりは山芋ばりの粘着力で、それでも諦めずにメールを送り続けたのだが、薔薇嬢がメールアドレスを変えて川田に教えなかつたという事件を契機に、川田は石上氏を

諦めたようだった。

けれど、その数ヶ月後には石上嬢のことで相談に乗ってもらっていた女の子とすっかり出来上がっていたので、登太郎は閉口した。

しかしながら登太郎は、当初の目的からは大分に逸脱したものの、結局友人川田が幸せになったのでまあいいやといった具合で一連の出来事を記憶の奥底にしまいこんで蓋をした。

それから数週間後のことである。

登太郎は、石上嬢に、メールアドレスを教えられたのだ。

教えられたというのは奇妙な言い回しではあるが、しかしながら実際問題、登太郎のメールアドレスは石上さんに教えられたのだ。というのはこういうことである。

何らかの事情でメールアドレスを入手したクラスの女子と登太郎はメールをしていた。といっても登太郎から送ったことは決してなく、返信専門のそっけないメールだった。

ところが、何を血迷ったのかその女の子は「あなたとのメールは楽しいですね。石上さんにメールアドレスを教えていいですか？」という旨のメールを送ってきたのだった。

登太郎は、この短期間の間に二度目の閉口をした。

よくわからないままに「いいよ」と返信すると、再び彼女からメールが来て、「じゃああなたから送ってください」という文章とともに石上さんのメールアドレスが添えられていた。

登太郎はいよいよ全く持って混乱した。

それは錯乱といっても良かったかもしれない。

「誰々が貴方のメールアドレスを知りたがっているので教えていいですか」というのが通常の形式だと思っていたので、いきなり彼女の方から石上さんに自身を推薦しようとしていたのも謎であったし、さらに紹介される側の自分からメールを送らなければいけないというのも、登太郎にしてみればとても理解できないことだった。

よくわからなかったが、かといって「いいよ」と了承した以上はメールを送らざるをえない。

渋谷登太郎は指定されたアドレスにメールを送りつけることにした。

「そういえば川田の彼女って、何処の高校なん？」

「西淵」

「あれ、聞かん名前やな。私立？」

「私立やで」

「そうなんや。どのへんにあるん？」

「福井県」

「——県外ッ?!」

川田は、愛深き人間であり、遠距離恋愛の人でもあった。

愛しのスイートのところまで片道一万円近く掛かるらしかったので、高校生の身分である彼の貯金はみるうちに磨り減っていたし、そこまでも中々会えないでいたらしい。

一方登太郎は、川田が彼女と会う何十倍もの頻度で石上さんとメールをするに至っていた。

直接話すのと同様、むしろそれ以上にメールにおいての石上嬢の文章は支離滅裂であったが、けれど不快感がないところも会話するのとまた同様であった。

いま思えば彼女は奇を衒^{てら}っていただけだろうと登太郎は振り返るが、それでも当時の自分はみるみるうちに石上嬢に惹かれていったのは事実であった。

いつの間にか時節は巡って冬も深まり、登校中に踏みつける霜柱が気持ちの良い音を立てる頃の話だ。

明瞭な冬らしさをとまなつた寒気がどんどんその色を深めていくのと同じように、登太郎も石上さんに対するなんとも得体の知れない想いを深めていった、と言えば聞こえがいいけれど、その実彼は自分の石上さんに対する感情を正確に把握できないでいた。

ある夜、川田から登太郎に着信が入った。

言うまでもなく惚気である。

三十分はそれに付き合った。

登太郎は内心、彼女と会うために困窮する川田に対して、この三十分の電話代を節約するなり、せめて彼女との電話代に充てるなりした方が良くはないかと思いつつもウンウンと頷いていたのだが、やがて会話の切れ目が訪れたとき、そういえば——と静かに切り出した。

「そういえば川田よ」

「なんぞ」

「僕はお前の二の舞を踏もうとしておるかもしれん」

「どういうことだ」

「少なくとも、すでに彼女の掌の上で舞っておるのは確かだ。それに少々舞い上がってもいる」

「まさか」

「である」

「茨の道ぞ。修羅の道ぞ。それでも往くか？」

「当たり前前田のクッサー」

「圧倒的男気……！ 骨は拾ってやるから安心しろ」

そんなこんなで登太郎は、石上嬢に告白することにした。

桐生登太郎、齡十六、厳冬にて、初春の訪れであった。

彼らの通う高校は二月になると、受験の都合上三学年の生徒は自

由登校になる。そして自由登校とは名ばかりで、実質のところ用事のない生徒は登校禁止であったので、校内には一年と二年の生徒しか居なかった。

登太朗はある日のメールの終わり際に、「明日話したいことあるから、放課後教室に残っててくれ」という旨の言葉を付け加えた。石上嬢は何の他意もなさに、「わかった」とだけ彼に送ってよこした。

当日である。

放課後の教室である程度人がはけるのを待ってから、登太朗は石上嬢を呼び出した。

教室には川田を含め、すでに事情を話しておいた仲の良い有人たちが窓際に立って、熱い応援の視線を登太朗に送っていた。

彼は、階段の踊り場の最上階に、石上嬢を呼び出した。

以前は三年生でにぎわっていたこのあたりも、今では静寂のみが住むに至っている。

階段の隙間から、校庭で野球部が精を出している情景が見える。

反対側には、むこうの校舎の職員室が見えるが、誰一人として登太朗たちに意識を向けている者は居なかった。

登太朗は、これほどまでに強い心臓の胎動を感じながら切り出した。

「なんで呼び出したか分かる？」

「うーん、わからへんなあ」

「そっか」

再び、沈黙。

もちろん、石上嬢はこれからどういう内容の話がされるかは分かっていたはずであるが、こういうときはわかっていないと答えるの

が定石なのだ。

もちろん登太朗も、「石上嬢がわざとわかっていないと答えたこと」をわかった上で、そうか、と頷くだけだった。

「あのさ。もう回りくどいの嫌やから言うけど、好きやねんけど」
「えーっ！ うそぉ！」

もちろん、ここまでの全ての流れが予定調和である。

石上嬢は登太朗の言葉にさして驚いていないだろうし、登太朗も石上嬢の驚きが演技の範疇であることは察していた。

しかしながら、ここから先は予定調和ではない。

登太朗は、あまりにも昂ぶる自分の心音に掻き消されて彼女の言葉聞き漏らさないように、全神経を聴覚に傾けた。

「うーん。ちょっと考えさせて」
「わかった」

ところで登太朗が告白に臨む心境であるが、正直なところ彼は絶対に振られると信じていた。なにせ相手は高嶺の花であるし、自分は背のひよろ高くて顔色の悪い、まるできゅりのような男だったので、客観的に見て釣り合いが取れてないのはわかっていた。なので、考えさせてと言わせただけでも勝ちみたいなモンだと思っていたし、鳴り響く沈黙の中でどうやって川田に慰めてもらおうか、などと考えてすらいた。

ところが。

「いいよ」

石上嬢は、驚くべきことに、肯定の意味を表す言葉を示したのだ。

「えっ、なんで」

思わず登太郎は聞き返した。

どうあがいてもきゅうりのブツブツが薔薇のトゲトゲと同じく見られることはないのだ、きゅうりはきゅうりらしく浅漬けにでもなつて薄い人生を歩んでいこう、なんてところまで考えていただけに、石上嬢の意表しか付かなかったその言葉を瞬時に理解することができなかった。

「なんでって、別にいいと思ったからいいって言っただけやけど」
「そうか……。ありがとう、うん。あれ、これ夢じゃないよな」

実に物語がかったクサイ台詞を、登太郎は何の臆面もなく吐いた。拳句に、彼が自分の頬を差し出して、つなってくれと提案したことも付け加えておこう。

それに対して石上嬢は引き気味であったが、とにかく二人は結ばれることになったのだ。

そこから特に恋人らしい会話はなかったけれど、二人はぽつりぽつりと言葉を交わして、それもいつものようにわけのわからない言葉ではなくお互いに相手に何かを伝えようとする言葉で、そうして

どちらともなく寒いから入ろうということ、その場はお開きになった。

教室では盛大に祝われた。

川田が心の底から祝福してくれているのを見て、ようやく登太郎はそれが現実のものとして実感でき始めて、そうすると今度は体の内側からわけのわからぬ高揚が、あえて名付けるのならば幸せそのものが溢れ出して、思わず彼は快哉を叫んだ。

その日の放課後は、部活組の終わりを待つて皆でファミレスに雪崩れ込み、登太郎の祝勝会が催された。

彼ら一辺は間違いなく、そのとき世界で一番幸せな空気が充溢した空間であつただろう。

不意に、登太郎の携帯が鳴る。

画面を開くと、石上さんからのメールであつた。

祝勝会の良い肴である。

当然、皆は顔を寄せて登太郎のケータイに釘付けになる。

「ごめん。やっぱり一週間考えさせて欲しい」

彼ら一辺は間違いなく、そのとき世界で一番不幸な空気が馥郁する空間だつた。

誰からともなく、解散する空気になった。

登太郎はある種の放心状態であつた。

そして期日の一週間を持って、ハッキリと登太郎は別れを告げられた。

ハッキリとした幸福の感触を伴つた瞬間があつたからこそ、不幸の底に落ちるまでの感覚をより鮮やかに彼は感じた。

かくして、「初恋は実らないものだ」ということを登太郎は身をもって知つたのだつた。

「川田、骨は拾わんでいいぞ」
「なぜだ」
「……骨すら残らんかった」

014 いわゆる、恋バナナナナ（完）（前書き）

ザッと一度読み返してみた。

今まで書いた全ての文章の中で一番の乱文だった。

けれど、訂正はしない。

最後まで読んで頂ければわかるが、文章の荒れ具合から筆者の心情を生々しく受け取ってもらえれば幸い。

なぜ荒れてるかって？

それも最後まで読めばわかるさ。

フフフ。

014 いわゆる、恋バナナナナ（完）

久方ぶりの読者諸氏、ごきげんうるわしゅう！

恋バナの続きをする前に、少々近況報告を挟ませてもらう。

挟ませてほしい、ではなく挟ませてもらう、と断言しているところに筆者と読者の力関係というものを再認識せよ。然るのち、かしづきたまえ。

さて、報告といったが、それは所信表明と言い換えてもよいだろう。

つまるところアレだ。

公募の新人賞に応募する原稿を書き出したぜ、という報告であり、その小説でせめて三次まで連なる選考の第一関門ぐらいは突破したる！ という意志の表明だ。

もちろんその行間紙背に、本作「筆持つ阿呆に、読む阿呆」の更新は明らかに遅くなるよという意味が込められていることは言うまでもなく諸氏はお気付きだろう。

さて、そんなわけだが、もちろん適宜空いた時間を有効活用してこちらの作品を更新しつつ、裏で心血注いでいる作品の進捗状況に關してもこちらで報告するので、何かあった際は宜しくといった具合である。

では、本編。

さて、前号では私の初恋とその弾け飛んだ様相をお話したと思うが、恋バナに關しては今号で終わりにしたいと思う。

そして、私の恋愛に關して、少し予想外の出来事というか、現在の恋愛で話すネタが増えてしまったので、途中の恋愛はなるべく手

短に話して、今の恋愛に関して焦点を当てて話したい。

私の二度目の恋愛は、千尋^{せんじん}の谷底に突き落とされた拳句、上から降ってきた百獣の王者と一戦交えた程度に心身が傷付いたその日から、進むこと二ヶ月ぐらい後の話である。

失恋から二ヶ月ほどすると学年が上がって、新しいクラスになった。

そこで私は新しい恋を見つけた。

テニス部に所属する大人しくて礼儀正しい少女だった。

なにより当時声フェチだった私にとって、その子の声はJUDY AND MARYのボーカルのYUKIに唯一匹敵するほどにツボを突いて来る声だったのだ。

なんか色々あって文化祭後ぐらいにくっ付いたけれど、特に何もないうまま突入したバイト漬けの夏休み、それから私のチキン、チキンアー、チキンエストハートも加味されて夏が明けた頃に別れた。

今にして思えば、付き合いたてのカップルが夏休みに一度しか遊びに行かないなんてどんだけだよって感じではあるが、恋愛経験がゼロだった当時の私を責めるようにとする者がいるなら、現在の私が代わりに相手をするので宜しく。

次の恋愛は、その年の冬ぐらいだったと思う。

その相手は、以前何かの折で連絡先だけは知っている程度の仲であって、それがどういう過程で再び御^おメール交換をするに至ったかは記憶が曖昧だけれど、多分恐らく私の記憶が耄碌^{もろろく}していなけりや、相手からメールを送ってきたような気がする、うん。

なんだか、最初は音楽の話をしていた気がする。

はつきり言って前に並んだ二つの敗史から学んだものは何一つとしてなかったが、この人には音楽的な視野を広げてもらったので、

結果的に負けたものとしてよかったと断言できる恋愛である。振られた後も、残情がなくなつた後も、この人に教えてもらったバンドを私は好んで聴き続けたということは、確かに恋愛から何かを得たという誇りの裏返しでもある。

さて、連絡を取り合うようになったとき、この人は私の友人の恋人であつた。

私は人の恋人というだけで自動的に恋愛対象じゃなくなるという便利な心情を持っていたので、メールをしているときは何の感情も持っていなかったのだが、さすがにしばらく経つと私の好き嫌いの如何いかにに関わらずメールをしているということ自体に罪悪感が芽生えた。

ゆえに、「彼氏居る人とはメールするのは倫理的に良くないのでやめましょう」という旨をもう少し噛み砕いてやんわりと伝えた。

これで終わりだと思つと少し寂しくはあつたけれど、まあ恋愛感情を抱いているわけではなかつたのでよいかとあつさり片付けたのだが、それからちよつと経つと「別れた」というメールが来て驚いた。

そのときの私の本心を吐露しようか。

「正直、やつた！」と内心ガツポーズをしたでもない、「やつちまつた！」という巨大な罪悪感でもない、その二つなら倫理的な良し悪しは別にしてまだ救いようがある。けれど実情は、「ああそうなんや。じゃあ、またメールするんかな」とそんな感じである。

なんか色々と鈍いし、悲しい。

そして今にして思えばこの人は私のことをもしかしたら好きだったのかな、と驕慢の如き考えをもたせてくれる事象があつて、その人が当事愛してやまないバンドがあつて、そのメンバーの中でも一番好きな人が居たのだが、「その人に似てるよね」ということを言われて、もうぶつちやけると多分それは告白に近い何かなんだと思つけど、でも当時の私は「そうなんや。その人と重ねられとるんかな。代用品なんかな。なんとなくシヨック」といった感じである。

なんか色々と鈍いし、悲しい。

ちなみに上記は、今書きながら思い出したことで、思い出すと同じ時に思わず溜息出た。

まあそんなこんなで一度だけ一緒に映画見に行った気がするけど、なんともまあ愚か者の私はそれ以上のアクションを取らず、時期を逃して明らかに相手が私に一抹の興味すらなくなったと思えるようなタイミングで私は告白して、死んだ。

千尋の谷底から這い上がったところを、再び突き落とされた気分だった。

けれど全て終わったことである。

もし今まで書いた三人の中から選ぶとしたら多分私はまたこの人を選ぶのだろうけど、そんな状況になることは間違いないし、あっても相手が蛇蝎だかつの如く私を棒で叩き殺そうと思うし、何より私は次の恋に燃えているので妄想の余地はない。

全て終わったことである。

さて、はしよると言いつつ間延びしてしまったが、やっとこさ今の恋愛に付いて紐解くときがきた。

なお、執筆の便宜上、私が今惚れている相手はたまちゃんとする。私とたまちゃんが出会ったのは、大学一年時の八月当初、今から遡ること一年と数ヶ月前である。

私は大学生になってからコンビニで金曜のみ夜勤のアルバイトをしていたのだが、夏休みに入ることと後期の時間割に余裕が出来るそうなことから、オーナーに頼んでシフトをもう一日増やしてもらったのだ。

日曜の夜勤の相方、それがたまちゃんである。

たまちゃんは私より一つ年上で、夢を追いかけているフリーターをしている。そしてなにより重度のオタクである。重症と言い換えてもいい。

けれど私は兄や友人にオタクが多いことや、自分も半ばインターネット中毒だったりしてオタクに対して偏見はなかったのも、それなりに最初から会話は弾んだ。まあ、今でこそたまちゃんのことは下の名前で呼び捨てているが、一緒に仕事した当初は苗字にさん付けで呼んでいた上敬語だったので、現在と比べるとやはり距離はなかなかあったのだろう。

一緒に仕事をしはじめてから何週か目にたまちゃんが誕生日を迎えたということで、ゆず胡椒を贈ったのはまだ記憶に新しい。

さて、笑顔が可愛く礼儀正しくさらに仕事において優秀なたまちゃんだったが、私は丁度この年の秋口にかけて別の女の子との半ば交通事故的な恋（もはやそれは疑問符の付く恋（？）であるが）に挑んでいたのも、たまちゃんに惹かれたのはもつと後で、はっきりと好きになったのは冬に入ってからである。

もう本当に心の底からメロメロで、アニメオタクだからということと話をあわせるためにアニメを見出したら、いつの間にかアニメ自体にもはまってしまっていて、もうどうしようという具合だった。そんな感じでそれなりに仲良くよろしくやっていた。

ここで、私が以前の恋愛から学んだ「鉄は熱いうちに打て」理論である。

好きって思ったらな、とりあえず誘わなければ！ ということで最近アニメ見始めたことを口実に、「アニメイト連れて行ってやー」とフランクに誘ってみると、即答でオーケーと言われたのでなんだか天にも昇ってしまいそんな気持ち毎日を過ごして、もはや天に片足を突っ込んだんじゃないかと思うぐらいの浮かれっぷりで迎えたデート当日、たまちゃんは一時間遅刻してきた。

「少しでも気があれば遅刻して来んやろう、常識的に考えて」「いや、夜勤明けやし仕方ないやん」「でも、俺も夜勤明けやん。夜勤明けでも好きなら起きるやろ」「ぐぬぬ……」という具合に、たまちゃんを待つ間私の頭の中で天使と悪魔が死闘を演じて、いざ悪魔が天使のクビをもぎとらん！ といったタイミングでたまちゃ

んは現れた。

妙に艶やかで大人の色香漂うたまちゃんの装いに、私の中の首が七割ほど千切れた天使ちゃんが息を吹き返して「あれは気合入ってるでエ！　これ、いけるでエ！」と逆に悪魔の心臓を一突きした。

かくして私はアニメイトデパートなるものを堪能した後で、ノリで居酒屋に行き、別に全然告白するつもりはなかったのにお酒の勢いで告白してしまった。

言うまでもなく、死んだ。

私の中の天使ちゃんは、その四肢を四方向から引つ張られてぶちぶちと千切れ、まるでだるまの如く死んだことは言うまでもない。

私は、けれど一途だった。

もしかしたら世間ではしつこいというのだろうか。

辞書には粘着質という言葉もある。

馬鹿向けに作られたテレビというメディア媒体ではストーリー予備軍とかも言うらしいが、それはあくまで馬鹿向けの言葉なので、明晰な頭脳めいせいきを持っているかつ高尚な私にはおよそ関係のない低俗な言葉だろう。

何が言いたいかというと、私は諦めなかった。

告白に失敗した後も気まづくならないようにしたし、むしろそれからの方が距離は縮まっていったように思われる。

私は必死に何かを取り戻すようにもがいて、たまちゃんを何度となく遊びに誘った。

たまちゃんは忙しい人だったけれど、私の誘いを無碍むざいにしたことはなかったし、かといって無理に応じてくれているという感じでもなかった。

初めてたまちゃんから遊びに誘ってきてくれたときはやはり天にも昇る気持ちだったし、初めてプリクラを撮った日にはゆでだこの

ように真っ赤で、プリクラをアップで見ると多分股ぐらが盛り上がっているかもしれない。

回りの友人は私とたまちゃんのやり取りを見て、社交辞令かもしれないが「良い感じじゃん」と幾度となく言ってくれた。

そんな具合に春が過ぎて、夏も佳境に入った頃である。

夏の終わりに私はたまちゃんを花火に誘った。

正直に言って、私は初めて告白したときから考えると何倍も距離は縮まっていたという確信があったけれど、でも再び告白したら振られるということに対しても同じくらい強く確信していた。

けれど、だからといって好きと言わずにはおれない。こういうのを自己満足の気持ちの押し付けの最低な奴と言っただろうけど、私は自分勝手であるというレッテルを受け入れる覚悟でたまちゃんに再度告白をした。

花火があらかた終わった後である。

夏の夜の静寂が二人の頭上から間断なく降り注ぐ。

「しりとりにしよーぜ」

「いいよ」

「しりとりに」

「りんご」

「ごりら」

「らいす」

「……好きやねんけど」

このやり取りを見て嗤った者、別に構わない。

一人の男が一度振られた相手に、それでも諦めきれないからともう一度、きつと振られるという絶対めいた恐怖と戦いながらした告白を、笑いたければ笑えばいい。

「好きやねんけど」の「ん」ぐらいから「ごめん、無理」と言われた私を、笑えるなら高らかに笑って魅せればいいのだ。

恐ろしいくらい良いタイミングで小雨が降ってきて、けれどこれは俺の心の涙だ、なんて陳腐なことを思う余裕が無い位いっぱい

ばいだった私は、なんとか今後気まづくならないようにフォローだけすると足早に逃げ帰った。

命からがらのフォローが幸いして、この後もたまちゃんとフラッと遊びに出かけたり、一度家にお邪魔したりしたのだが、何の進展もなかった。

さて、随分と長くなった。

ここからが真の本編である。

なぜなら今書く内容は私の現実世界の友人すら誰一人として知らない情報であるし、なぜかといえばこれは2011年12月5日に起こったできごとであるからだ。

いわゆる一昨日のお話。

たまちゃんに二度振られてから、私の生活は大きく変わった。

それは失恋に由来しているわけではなくて、小説家になるという目標が出来たために大学を辞めたこと、それに付随して新しいバイトを掛け持ちしたこと、が原因である。

そんなわけで多忙になり、実に久しくたまちゃんと遊ぶことはなかった。

たまちゃんのことを好きじゃなくなった瞬間はせつな一分一秒一刹那たりともなかったと断言できるが、情熱を小説に傾けた分たまちゃんに対する関心が減っていたのも揺ぎ無い事実だった。

余裕がなかったとも言える。

さて、ラーメン屋で働きだして早二ヶ月ちよつと、仕事にも多少慣れてきたころあいであるし、応募向けの小説も書き出したという今。

物事は大抵、最初の出だしに転がして勢いをつけるのが大変なので、転がり出した今になって生活にも多少の余裕が出てきた段階だ。

私の中で息を潜めていたたまちゃんへの恋慕が、日を追うことに大きくなってきたのだ。

私は常日頃より妄想家であるのだが、毎夜たまちゃんのことも頭に浮かんできてしまい（この小説で誇張表現は常であるけれどこれは決して誇張ではなく）不眠症になってしまったのだ。

一日バイトしてきて疲れた体で深夜の一時ぐらいに布団に入っても、ひどけりや朝の六時まで寝付けないだとかそんなことが現実として週に二回も三回もあった。

この二、三週間近くは本当に辛い日々だった。

この期間、私は色んなことを考えた。

「追いかけられる恋愛より、追いかける恋愛の方が良いよねエ！」
だとか、「俺の経験上、今の恋愛は諦めた方がいいよ」だとかいう類の言葉は総じて耳に入らなかったし、総じて殺したくなかった。

もう色々と爆発寸前だった。

限界だった。

私は考えた。

きつと告白しても振られる。

そりゃあ、好きって伝えることが出来たら少しは楽になるだろうけれど、それだけだと進歩が無い。何かしらのプラスアルファが欲しい。

私は考えた。

心が奪えなくても、体だけなら奪えるんじゃないか？

下種^{げす}だ何だと罵る者は罵っておればいい。一人の人間に幾度と拒否されれば、人間こうなってしまうものなのだ。知り置け！

さて、そういう低俗で最低な思考の元、私は例によって夜勤明けの日にたまちゃんの家にお邪魔することにした。

それが一昨日である。

私もたまちゃんもコタツの一角に座りながらテレビを見ていた。他愛もないことを喋りながら、アニメを観ていた。たまちゃんと遊ぶのが久しかっただけに、普通に楽しくて充実した時間だったこと

は認めざるをえない。

なんならこのまま一日が終わってもいいとさえ思った。

けれど私は思い直して自分を鼓舞した。

まあ実のところ襲うとまでは考えていなかったけれど、せめて唇ぐらい奪ってみようか、というぐらいには本気で考えていた。

とりあえず寝転がったり起きたりを繰り返しながら、徐々に距離を詰めた。

割りと露骨だったのでたまちゃんも気付いていたと思うが、こちらとてたまちゃんが気付いていることに気付いているのである。むしろ避けられないなら好都合、というようにしてジリジリと詰め寄った。

私は、ここで大変なことを思いついた。

さて、ここでこの小説の当初のスタンスを思い出して欲しい。

筆者が真に読者に優しいことはあっただろうか？

否。

答えはノーである。

もちろん、ここまで書いてきたことは嘘偽りない全くの現実のことである。

ゆえに、読者は続きが気になる。

気になって仕方がないのだ。

けれど、私は書かない。

読者は続きが気になるだろうが、絶対に書いてやらない。
どうだろうか。

ここまでの長文を真剣に読んでくださった方なら、恐らくこの続きが気になって三日ぐらいは苦しむだろう。

ザマアミロ、としか言い様がない。

ふふふ。

けれど、最後の慈悲を与えよう。

深くは言わないが、結果的に言えば失敗した。

それがどういう過程で、どう失敗したのかは秘密だが、とにかく失敗した。

これで痛みわけということにしてほしい。

本当を言えば、ちゃんと最後まで書ききろうと思っていたのだが、回想することすら今の私には辛く荷が重過ぎるのだ。

だからここで、私の恋愛談については筆を休むことを許してほしい。

014 いわゆる、恋バナナナナ（完）（後書き）

ごめんなさい。

本当に書くのが辛かった。ハハ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5025y/>

筆持つ阿呆に、読む阿呆。

2011年12月7日03時10分発行